
現実世界と並行世界

小来栖 千秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実世界と並行世界

【Nコード】

N9359Y

【作者名】

小来栖 千秋

【あらすじ】

「全てを話して、あなたは信じてくれる？」

リアルワールド バラレルワールド

現実世界と並行世界が存在する世界で、一人の少年が世界の交錯に巻き込まれる。少年が飛ばされた世界は『覚醒者』と呼ばれる人知を超えた力を有している人々が争う世界だった。少年は元の、自分の世界へ帰ることができるのか？

二つ存在する世界の真実は？ 二つの世界を守るために、戦おうとする少年へ逃れられない影が忍び寄り、バトルSFファンタジー。

あなたは、どちらの世界がリアルだと信じますか？

序章 交わりの始まり

†

世界は今を生活している現実だけだと、どうして言えるだろうか。選択を迫られた一点から、それぞれに枝分かれした世界がないとどうして言い切れるだろうか。

そのような世界は存在しえるかもしれない。

それらを確認する術はないが、それらの世界が交われれば、それが証拠と成りえるのではないだろうか。

そう思ってしまうのだ。

いつか複数存在する世界が交わる時が来たとして、人間はその世界の存在をどのように捉えるのだろうか。

肯定するだろうか、否定するだろうか。

いや、そもそも共存できるのだろうか。

それらの杞憂はその時が来てみなければ分からない。

しかし、人——あるいは世界は寄り添いあって生きていくことが出来ると思うのだ。

序章 交わりの始まり？

太陽が沈んだ街の夜は数メートル先の世界が分らないというほどに暗いことはない。

しかし、どんよりとした厚い雲が空を覆っているため、夜空に輝いているはずの月や数えきれない数の星たちはその姿を隠している。普段はそれらの輝きで夜の街は照らされている。夜の街を照らす街灯の明かりがあるとはいえ、月や星の輝きがないことはどこか心を不安定なものにする。

そのような夜の街には硬質な質感を与えてくる建物が均等な距離を保って、連続で建てられている。それらの建物を地上から見ると、壮観であり圧迫感が身体を恐怖させる。

夜の街には人がいる気配がまるでしない。

建物の窓には明かりが灯っており、わいわいと賑やかな声が今にも聞こえてきそうだが、それらの声も街灯だけが虚しく照らす街の雰囲気すぐに消されてしまう。

「はあはあ……」

その建物が建ち並ぶ圧迫感が溢れる街を必死に走っている人影がある。人影は、どこまでも続くかのような建物の間を縫って行く。

街の街灯に照らされるその人影はどこかの学校の制服を着ているようで、走っている姿をよく見れば、成人していないようにも見える。

（まだ追いかけてきているか……）

人影は走りながらも、自身の後ろを振り返る。走っている人影は、誰かに追われているかのように必死だった。

視線を前に戻し、さらに先を急いで、人影は走っている足を止め

ない。荒い息遣いだけが木霊するのは、現代ではとても考えられない。しかし、実際に周囲からは他に音も聞こえてこず、人影は自分の走る音と呼吸の音だけの街を走っていた。

（出来るだけ遠くへ——）

その一心で、人影はどこまでも走り続ける。

そこへ、

「いつまで逃げるんだよー、ユウキ——っ！—— さっさと観念するんだな——っ！——！」

周囲への騒音を顧みない大声が響きわたる。その声はスピーカーを介して、街中に届いているのではないかと思うほどに大きい。

「はあはあ……」

（ち……っ、もう追い付いてきやがった——！？）

聞こえてきた声は硬質感漂う街を走っている人影——『ユウキ』を追いかけている。ユウキは追ってきている声の主たちから逃げているのだ。

（なんで追ってきてんだよ……っ！？ たく——っ！）

ユウキは自身が追われている理由を知らない。思い当たる節はあるにはあるが、それを確認している暇はない。

「見つけたぞ——っ！」

「な……っ！？」

一直線に大通りを走っていたユウキに対して、大通りと繋がっている右の道から現れた全身を黒い防護スーツで覆っている追手の男たちがライフルを発砲してくる。いきなりライフルで撃たれるユウキだが、咄嗟に大通りに路上駐車されている自動車の陰に隠れる。

「ぜえぜえ……。くそ——っ」

（街中で銃連射とか止めるよな……）

そう、見つかると思わぬ間に銃で狙い撃ちにされるのだ。その度に、ユウキは自動車や建物、街路樹の陰などに隠れている。追われているユウキは発砲音に気付いた誰かが、警察に連絡してくれることを祈っているが、周囲には明かりの点いている窓が見当たらない。

周囲の建物がマンションから雑居ビルに変わっていたのだ。

「ち……っ！ 周りこめ！！」

ユウキが自動車の陰に隠れたところをみた追手の一人は、ついてきている仲間に指示を出す。その指示を聞いた仲間は、迂回して挟み打ちにしようとしているみたいだ。

（向こうは複数か……。正確な数が知りたいな……。てか、捕まえる気なのか、殺す気なのかも分かんねえ……）

「ただやられるわけにはいかない、か——っ！」

じつと隠れているユウキはこのままではやられるだけだと判断して、追手の何人かが大きく通りを迂回しているスキを見て、残った追手の男たちに突撃を行う。

「な……っ！」

（残った追手は五人——か！）

自動車の陰からいきなり飛び出してきたユウキを見て、追手の男たちは一瞬ひるむ。その一瞬をユウキは見逃さない。

「ふ……っ！！」

「が……っ！？」

短い呼吸を吐いてユウキは追手の男の一人を飛びあがったの回し蹴りで吹き飛ばす。大の大人を吹き飛ばすほどの蹴りの威力はとも成人もしていない少年の力には思えない。

しかし、吹き飛ばされた男が、街路樹にぶつかりそのまま気絶したのを見る限り、ユウキをただの少年と思うことはできなかった。

「なっ！？ こ、こいつ——っ！」

「くそがきがああああっ！」

仲間がやられたことに激昂した男たちが照準も定めないうまくフルを発砲する。

「げっ！？」

近距離で撃たれた弾丸はユウキの急所に狙いが定まっていなかったが、流れ弾がユウキの左肩をかすめる。

「ぐう……」

かすめただけだったが、裂けた制服の肩口から血が流れる。その痛みを感じた瞬間にユウキは一度追手の男たちから距離を取る。

（迂回してる連中がもう少しで、後ろの通りから出てくるか……。さっさと片付けないと――）

そう焦るユウキだが、実弾を使う相手をさっさと片付けることは容易ではない。突撃も追手の一人を倒すことしかできず、すでに一度してしまったためにもう一度突撃を行ってもそれほど効果はないだろう。何よりもカウンターを受けやすくなる。それが拳ではなく銃弾なので、常套手段とするべきではない。

一度距離を取ったユウキを追撃するように、追手の男たちは発砲してくる。その追撃も、ユウキは通りに面している建物の陰に隠れてやりすごす。これで前方からの銃撃は凌ぐことができるが、後方からは格好の的になる。

（さて、どうする――）

ほんの一瞬の間に、ユウキは思案を巡らせる。そして、すぐ行動に移す。

「いつまでも隠れてられると思うなよ!!」

ユウキが先ほどもで逃げていた方向である前方からは追手の男が四人いて、建物の陰に隠れているユウキを狙って何度も銃撃を繰り返している。

さらに追手の男たちのうち数人が、ユウキを挟み打ちにしようと大通りを迂回しているだろう。そちらの数は把握していないユウキだが、そのことは気にも留めていない。

「そんなこと全く思ってたねえよ」

追手の男の挑発に乗るように、ユウキは躊躇なく隠れている建物の陰から出て、一気に大通りに反対車線まで走る。

「逃がすかあ！」

その行動を見た追手の男たちはユウキを逃がさないように追いかける。

（やはりついてきた。これで――）

建物の陰から飛び出したユウキは歩道から車道に飛び出し、街路樹を飛び越えて反対車線の歩道まで辿りついた。

「はぁはぁ……、ぐ——っ!？」

街路樹を飛び越えた後の着地の衝撃で、銃弾がかすめた左肩の傷に痛みが走る。

しかし、その痛みに蹲っている場合ではない。視線を上げたユウキは、目の前にある建物の入り口のガラスを突き破るように入っている。

「な!？ あ、あいつ——」

追手の男たちは、ユウキが入っていった建物を見て、驚きの表情を見せる。

その建物は銀行だった。

序章 交わりの始まり？

銀行の入り口を突き破って入ったユウキは、明かりが消されている一階の受付を見渡している。無論それは銀行強盗しようとか金庫を探そうとしているわけではない。

（銀行や金融機関には必ずあるはずだ——っ）
ユウキが探しているものは別のものである。

目的のものを探そうと本来なら銀行職員が入る受付の奥まで、ユウキは並べられている机を飛び越える。

「どこだ……!？」

躍起になって探しているところに、

「俺たちを銀行強盗にでも仕立て上げるつもりかあ!？」
追手の男たちが銀行の中へ入ってくる。

（こいつらも躊躇なしか——!!）

銀行のフロア内に現れた追手の男たちを見て、ユウキはすぐに飛び越えた机の下に隠れる。そのコンマ数秒後に、けたたましい音とともにライフルの火がふく。

「くそ……っ」

容赦なしの銃撃が銀行のフロア内に響きわたる。その銃弾は銀行の受付内の机や椅子を貫通していき、壁に設置されているロッカーにも穴をあけていく。

（まずいな——）

銃撃が止むまで机の下から出られないユウキは、身動きがとれない。このままではじり貧であり、男たちもユウキ同様に机を超えて狙ってくるだろう。

この危機的状況を一発解消するために、ユウキは目的のものを探す。

（ドラマや映画なんかじゃ、よくこの辺りに——）

頼りない知識ではあるが、あてもなく探すよりはマシだろうとユウキはフロアを区切るように長く設置されている机の下を這って進みながら探す。這って進むユウキの後ろには、肩から流れている血の痕が残される。

その間もライフルの発砲音は止まらない。

「……？ あいつ移動してるぞっ！」

何度銃撃を行っても反応がないことに気付いた追手の男の一人が、机を飛び越えて銀行の受付内に行こうとする。

（げ……っ、ばれたか——）

なるべく物音をたてないように慎重に進んでいたことが逆に男たちに気付かれる要因になってしまった。

（こうなりややくそだ——）

どちらにしろ追手の男たちも机を飛び越えてくるだろうと判断したユウキは、机の下を這って進むことを止めて立ち上がる。

「いたぞ——っ！——」

当然追手の男たちにはすぐに気付かれるが、ユウキは気にしない。立ち上がったそのまま受付の長い机を並走する。そして、机の下に手を当てて、目的のものを手探りで探す。

「待てえ！」

そのユウキのすぐ後ろを、受付の机を飛び越えた追手の男が追いかけている。振り返ってその様子を確認したユウキは、さらに走る速度を上げる。

「くそ、こいつ速い——」

銀行の入り口付近でライフルを構えている男たちは仲間にあたることを考慮して、発砲することが出来ないでいる。

（今のうちに見つけないと……）

そう焦るユウキの左手が、机の下の出っ張っている何かとぶつかる。

「……っ！？」

それを感じてユウキは立ち止り、急いで机の下を確認する。

（あつた——）

そこにはユウキが探していたものがあつた。

ユウキが探していたものは、外へ緊急の連絡ができ、ブザーを大音量で鳴らす『非常ボタン』であつた。

（金融関係には絶対にあるもんだろ、これ——）

目的のものを見つけたユウキは、それに飛びかかるようにしてボタンを押そうとする。

「……？ な——っ！？ やつをとめろっ——！」

それに気付いた追手の男の一人が叫ぶ。

「ち……っ！」

気付かれたことにユウキは舌打ちをする。その背中に受付の机を飛び越えた男が飛びかかって抑えようとする。

（やば——っ）

捕まる。

そうユウキが思つた瞬間、銀行のフロア内に強烈な風が銀行の入り口のガラスや窓ガラスを割って吹き荒れる。

「な……っ！？」

いきなり吹き荒れた強風に追手の男たちは、建物内の壁まで吹き飛ばされる。ドガッという大きな音とともに男たちは壁に衝突し、そのままずると床に倒れていく。

「はあはあ……」

（やつとか——）

強風に吹き飛ばされて気を失つた男たちをユウキが一瞥していると、

「ユウキ——！！」

声がかけられる。そちらを振り返ると一人の少女が立っていた。

少女の名前は『ミユキ』。

肩を少し超えるほどに伸びたストレートの髪が驚くほどに綺麗な黒色で印象的なユウキの幼馴染みである。

「間に合つたみたいだね——」

「ぎりぎりだけだな」

「仕方ないでしょ。連絡きたのお風呂入ってたときだったんだもん――」

さきほどの強風によって割れた銀行の入り口のガラスを踏みしめて、少女――ミユキはユウキのもとへ駆け寄って言う。その言葉は間違いではなさそうで、タンクトップの上に薄いカーデイガンを羽織り、ショートパンツを履いているだけの服装から覗いている肌は少し火照ったような色合いをしている。その彼女は肩に小さなバツグをさげていた。

「なるほどね……」

そのミユキの肌を見て、おもわずユウキは視線を逸らす。

「連絡をくれてからどうだったの？」

「どうも……。喫茶店で別れてから、ずっと追いかけてるんだよ。もしかしたら、喫茶店から張ってたのかもな」

ユウキがミユキに連絡を入れたのはこの逃避行が始まったすぐであり、もう三〇分以上も前のことだ。その後からの状況をミユキに説明する。

「追ってきているのが誰か分かってるの？」

「いや、分からない。俺を捕まえようとしているのは分かるが、何が狙いなのかもさっぱりだ」

追われているという現実是不変変わらないが、その理由はユウキにも分からない。

「ともかく、追手きてるのはこいつらだけじゃない。さつきスピーカーでこいつらのボスみたいなやつが叫んでたから、まだ油断は――」

そこに再び声が聞こえてくる。

「その通り。まだお前を捕まえるのは諦めてはおらんぞ？」

それはまたしてもスピーカーを介して聞こえた男の声だった。

「……っ!？」

聞こえてきた声に、ユウキは敏感に反応する。どうやらスピーカーの声の男は、銀行の外からこちらの様子を窺っているようだ。

「さっさと出てこい! お前は袋のねずみだぞ?」

スピーカーから聞こえてくる音のほかに、ユウキはエンジン音が紛れていることに気付く。

(車……?)

「どうするの?」

「何が目的かは分からないが、捕まる気はない。逃げよう!」

「どうやって……!？」

銀行の入り口は別の男たちに抑えられているだろう。すぐに突入してこないのは、こちらを警戒しているからだろうか。

「裏口があるはずだ。あいつらを牽制するためだ。もう一発頼むよ、ミユキ!」

「しょうがないなあ、もう――」

ユウキの言葉の意図を理解したミユキは、銀行の入り口へと向き直る。

その瞬間、またしても強風が起こる。その強風は銀行フロア内の机や椅子を持ち上げ、そのままユウキを捕まえようと追っている男たちがいる外へと吹き飛ばす。次の瞬間には、その机や椅子やらが風とともに襲いかかってきたのを見た、男たちの悲鳴が夜の街に響きわたった。

「さ、今のうちに行こう!」

そう言って、ミユキは振り返る。

「ああ!」

序章 交わりの始まり？

どれくらい走ったのだろうか、分からなかった。

気がつけばユウキもミユキも疲労から足を止めて、近くの隠れやすい場所に身を潜めている。

「ち……っ」

「大丈夫——？」

肩で息をしながら左肩を押さえているユウキに、ミユキは心配の声をかける。

「ああ……。なんとか——だけどな。今何時だ？」

「え？ 日が回って二時過ぎだけど、なんで？」

「夜明けまで耐えればなんとかなるかもって思っただけどな……」

答えながら、ユウキは周囲へと視線を巡らせる。

追いかけてきていた連中が近くにいないか、と周囲への中注意を怠っていないのだ。それは、まだ逃げきれないとユウキが判断していないからだ、ミユキはここまで逃げてこれれば大丈夫だろう、と完全に安心しきっている。

「どうしたの？」

「まだ追いかけてくるかもしれない」

「まさか——っ！？ ここまで来たんだよ？」

先ほどまでの建物ばかりが並んだ街中から、ユウキがいる場所の景色は随分と変わっている。太陽が昇る前ということもあり周囲の景色をはっきりと認識することはできないが、建物の明かりがないということは市街地を大きく外れているのだろう。必死に逃げてきたユウキは自分がどこに向かって走っていたのかも分からない。

「安心はできないさ。合流するまでに誰か見たか？」

「？ ううん。ユウキと会うまでは人とすれ違ってないけど——」

「そうか……」

「それがどうかしたの？」

ユウキの質問が何を指しているのか分からないミユキは、焦ったように尋ねる。

「人払いがされているのかもしれないってことだよ。最初から向この術中にハマってるのかもしれないな」

「そ、そんな——！？」

ユウキの推測を聞いて、ミユキは戦慄する。それが当たっているならば、ここは敵の集団のど真ん中ということになりかねない。そうだとしたら、助かる可能性は限りなくゼロになる。

「そうだとしても大丈夫さ。最低でもお前だけは逃がすよ」

「はあ——っ！？ 何言ってるのよ！ 自分が一番危ないっての分かっているでしょ？ ユウキを置いて逃げるなんて出来るわけないじゃない——！」

声を荒げるミユキ。自己犠牲を厭^{いと}わない、というユウキの態度に腹が立ったのだ。

ユウキもミユキも危険な状況であることは変わらないが、その度合いはユウキの方がはるかに高い。ここで守られるべきなのはミユキではなくユウキだ、というのがミユキの判断だ。

「女子に守られるってのは男のプライドが許さないんだよ」

「そんな問題じゃないでしょ？ 狙われているのは私じゃなくて、ユウキなんだよ！？ ここでユウキに守られて私だけ逃げたら、あなたのお父さんに会わせる顔がないわよ！」

声のボリュームを落とさないミユキは、さらに声を大きくして言う。ユウキは、ミユキの言葉の内容よりも、その大きさに気を取られてしまう。

「そう言ってもらえるのは有難いけどな、もう少し声のトーンを落とせよ」

「え………？」

「この場所がばれるだろ」

そう注意を促すユウキだが、それはもう遅かった。

ユウキとミユキが隠れている場所一帯に、急に強烈なライトが当てられる。その眩しすぎる光を浴びて、

「な、なに……っ!？」

「遅かったか——!!」

二人は眩しさに目をくらませるように、目を細める。

強烈な証明が当てられて、ユウキは自身がどこに隠れていたのかをようやく認識する。どうやら、ここは郊外にある公園の一角のようだ。遊歩道の端に設けられている藪の中に、ユウキとミユキは隠れていた。その二人の後ろは公園と車道を区切る二メートルほどの金網しかない。

（後ろに逃げ道はない……か）

それに気付いたユウキは、苦虫を噛むように下唇を噛む。逃げた先を把握しきれなかったことに対する自分への憤りだ。

そこに、

「そこに隠れているのは分かっている。さっさと出てこい。こちらも追いかけっことは疲れたのだ」

男の声が届いてくる。

その声は先ほどのスピーカーの声の男と同じものだ。そのことに気付くと、ユウキは身体を震わせる。

（ユウキ……？）

そのユウキの反応を感じて、ミユキは驚く。

その反応はそれまでミユキが見たこともないものだった。敵を眼前にして身体を震わせるといふのは、武者震いしか見たことがない。しかし、このユウキの身体の震えはとてもそれだとは思えない。

「ここまでよく追ってくるな!」

強烈な光の先にいるスピーカーの声の男に対して、ユウキは言葉をかける。

「こちらとしても、子ども一人にこんな徒労はかけたくないのだがな——。こちらの計画としても、お前が必要なのだよ。すんなりと捕まってくれないだろうか?」

「は……っ！！ そんなのはごめんだね」

「そうか……。残念だよ」

ユウキの返事を聞いて、スピーカーの声の男は表情は見えないが残念そうに言う。

（そんなことはさらさら思っただろうな——）

じっとしているだけではただ的になるだけだと判断したユウキは、じりじりと相手との距離を測りだす。せめてミユキだけでもこの場から逃がさなければ、とユウキは思考を巡らせる。

「残念……？　さんざん俺を追いかけて回しておいて、捕まる気なんてさらさらなのは分かってるだろ？」

「たしかにそうだな、すまない。これ以上の問答は不必要ということだな？」

「いや、一つ聞かせてくれ。お前たちは、なぜ俺を狙う？　俺が必要と言ったが、何が目的だ？　何か計画でもあるのか？」

ユウキは話を引きのばそうとする。

それはミユキをこの場から逃がす方法を考えてともに、自分自身が狙われている理由を探るためだ。

（敵の数が正確に分からない……。武器もマシンガンだけってことはないだろうな——）

次第に目が慣れてきたとはいえ、依然としてユウキたちが隠れている一帯を照らすように強烈な証明が点けられている。その光のせいで、向こうの正確な位置が把握できないでいた。

「目的はもちろんあるさ。しかし、それをここで話す必要はないな。お前を捕まえてから、話せば事足りることだ。今のお前が気にすることじゃないさ」

「そう言われても気になるものは仕方ないだろう？　理不尽に捕まるのは嫌なんですね。そっちが話す気がないのなら、俺も絶対に捕まる気はないぞ？」

（何かは分からないが、目的はあるってこと——か……。まあ、親父関連だろうな）

スピーカーの声の男の話を聞いて、そうユウキは判断する。

それに間違いはないだろう。ユウキには、これほどまでに執拗に追いかけて回される覚えがそれ以外に思い付かなかった。

ユウキの父親は国家企業に属し、ある研究を行っている。子どもであるユウキはそれだけしか知らないが、何度か父親が自身の研究成果を家に持って帰ってきているのを見たことがある。ユウキは恐らくそれに関することだろう、と判断する。

（だとして、俺を捕まえることで何がしたい……？ 何が目的だ？）
ユウキの父親の研究成果はかなり特殊なものであり、その内容を知っている人物も限られてくる。今、ユウキと相對している男がそれを知っているとしたら、かなり政府に近い連中ということになる。

ユウキの返事を聞いて、スピーカーの声の男は光の先で強く頷く。
「なるほど、それはたしかにそうだな。では、強硬手段に移させてもらおうか——っ！」

「……っ！？」

（まずい……っ！）

一拍遅れて反応したユウキは隠れていた藪の中から飛び出して、隣にいるミユキを地面へと強引に伏せさせる。

「な、なに——っ！？」

ゴオオオオオオオオオオッ！！！！

と、ミユキが声を上げた瞬間に炎が二人の頭上を通過する。

いきなりのことに驚いたミユキは、

「きゃ——……！！」

と叫ぼうとするが、寸前のところでユウキの手がそれを止める。
今叫ばれたら、二人の位置を完璧に相手に知られてしまうところだった。

（火炎放射——。とんでもない銃火器を持ってきたもんだな……）

放たれた炎の行方を視界の端で追って、ユウキは感想を漏らす。
火炎放射器など生きているうちに、生でお目にかかれるものではない。そのことに単純に感動しているのだ。

しかし、頭の隅では別のことも考える。

（捕まえる、と言っておきながら、一帯を焼き掃おうとする行為……。これくらいじゃ死なないってことも織り込み済みか——？）
「むううう……っ！」

そのユウキの下で、口を手で覆われているミユキがもごもご何か言葉を発しようとしていた。

「……？ あ、ああ悪い——」

気付いたユウキは、ミユキの口から手を離す。

「ちよつと——！ 死ぬかと思ったじゃん——！」

「悪かったって——。けど、あそこで叫ばれたら一発でこっちの隠れてるところがばれるだろ？」

冷静に指摘するユウキだが、会話してる時点で大体ばれてるでしょ、とミユキは思う。それは口にはせずに、ミユキはユウキの顔なるべく直視しないように小さく、

「それはいいから……、も、もういいでしょ——」

「……？」

ミユキの言いたいことがわからずに、ユウキは困惑する。すると、
「だから……っ！ いい加減どいてよ——っ」

ミユキの言葉で、ずつとミユキの上に覆いかぶさるようにして身体を伏せていたことに気付く。

「あ、ああ——。悪い……」

慌てて、ユウキはミユキの上から身体をどかせる。やっと身体の自由を得たミユキは、

「重かったじゃない——！！」

と覆いかぶさっていたユウキに対して声を荒げる。

「だから、悪かったって謝ってるだろ。それに今はそれどころじゃないから、文句は後で聞くんよ」

「それどころじゃないって……」

わなわなと身体を震わせるミウキの頬は少し赤く染まっていた。
ユウキの淡泊な言葉が癪に障ったようで、さらに声を荒げようとするが、

「来るぞ——」

ユウキの声で冷静さを取り戻す。

「……っ!？」

ユウキの言葉通りに、照明の光の先から数人の男が両手を広げて襲いかかってくる。その手には鋭利な刃物が握られている。

（今度は斬りつける気か？ やり方をやたら変えるな……）

敵が視界に入ると、ユウキは隠れていた藪の中から飛び出して、襲いかかってくる男の一人へ強烈な回し蹴りを放つ。

「ぐ……っ!？」

急に現れたユウキの蹴りを男の一人は受けとめることも出来ずに、まともにくらう。蹴りをくらった男はそのまま数メートルも吹き飛ばされる。

（まず一人）

敵の総数が分からない以上、一人を倒したところで安心することはできない。襲いかかってくる男の数、さきほどの会話の相手、照明を点けている人物、最低限のそれらを足しても一〇人近くはいらるだろうとユウキは推測していた。

「こいつ——!!」

姿を見せたユウキに、さらに男が右手に持った刃物を袈裟斬りに振りかかってくる。強い逆光の中、寸前のところでユウキはそれかわす。

「な……っ!？」

（予備動作が大きい。戦闘のプロではないのか——？）

斬りかかる前の動作が大きいことに、ユウキは相手への疑問を感じる。それを今結論づけている場合ではないので、ユウキはかわした後の一拍で相手の鳩尾に後ろ回し蹴りを見舞う。

「がぁぁぁあつ！！！」

鳩尾を蹴られた男は呼吸が止まる一瞬の間に、仰け反るように吹き飛ぶ。

（これで二人）

「ミユキ、そこから出るなよ！」

さきほどまで隠れていた藪に背を向けて、ユウキはミユキが参戦しないようにクギを刺す。しかし、それは遅かった。

「はぁ！？ ユウキだけに戦わせてらんないわよ」

振り返れば、ミユキはすでに藪から出ていて、ユウキのすぐ後ろに立っていた。

「……はぁ——、お前つてやつは……」

分かり切っていたことだが、ミユキは守られているだけで満足する性格ではない。あくまでも狙われているのはユウキであり、ユウキを自分が守らなければ、と思っているのだろう。

思い出すようにミユキの性格を再認識したユウキは、ため息を吐く。

「出てきた以上は仕方ない。半分は任せたぞ？」

「分かっているわよ！」

「なに、くつちゃべってんだよ——っ！！」

話している途中に、言葉の荒い男が先頭に数人の男がさらに迫ってくる。その形相はともユウキを捕まえようとしているものには思えないが、だからといって怖気づいているわけにはいかない。

次々に襲いかかってくる男たちを、ユウキとミユキはひらりとかわし、なぎ倒していく。

「相手の数は目星がついてるの？」

「正確じゃないが、一〇人程度はいるだろう。一人でも取り逃がせば、また追われる。ここで全員叩くぞ！」

「わかってる——っ！」

お互いに声を掛け合うユウキとミユキは、それぞれが向かってくる男を素手で倒していく。二人の力はとても年齢相応のものには思

えない。

「……子どもの力ではないな」

（もしかとは思っていたが、この二人も——）

ユウキとミユキの戦いぶりを照明がある位置から見ているスピーカーの声の男は、ユウキとミユキがただの子どもではないと判断する。

「このままではやられるのはこちら側だな。もう一度用意を」

「はっ！」

突撃させている男たちに刃物を持たせている時点で、無傷で捕えることに執着していないスピーカーの声の男は、先ほど使用した火炎放射器を再度準備させる。その火炎放射器はスピーカーの声の男の隣に配置されており、砲口がドラム缶ほどの大きさもある。個人で使用するようなちやちな火炎放射器ではなかった。

「これで手傷でも負わせられればいいのだが——」

まだ突撃させた仲間が戦っていることも気にせずに、スピーカーの声の男は悠然と呟く。そこに、仲間への心配など微塵もない。あるのは、目的の遂行のみだ。

一方で、

「ち……っ！」

（粘るな……）

数人を気絶させたところまでは良かったが、残った男たちが持っていた刃物を捨て拳銃を取り出すと形勢は逆転した。

素手で男たちをなぎ倒したユウキとミユキも、拳銃相手にまともに飛びかかることはしない。身体を弾丸が貫けば、それは致命傷になりえるからだ。

「どうすんのよ——？」

相手が拳銃を取り出したところで、ユウキとミユキは一旦藪のそばに林立されている木の陰に隠れることにしていた。

「どうするもなにも……」。銃相手に正面から突っかかるのは自殺行為だろ。俺はともかくミユキじゃ危険だ」

「でも、ずっとここに隠れてるわけにもいかないわよ!？」

「それもわかってる——!」

ミユキの言う通り、じつと木の陰に隠れていてもいずれは捕まるだろう。後ろには逃げる道もなく、この状況を打開するにはやはり相手を沈黙させるしかない。

男たちは依然として見境なく銃を乱射してくる。弾の装填がなくなるのを待つのも一つの手かと考えるが、そこは交代で撃ってきているだろう。その銃の発砲音とミユキの言葉がユウキの焦りを増させ、最良の判断ができない。

(どうする……どうすればいい……っ!！)

ユウキにとって最も大事なのは、ミユキの安全だ。しかし、藪の中に隠れていたミユキも出てきたことで、それはすでに叶わないと言える。ならば、次を取るべき手段は狙ってくる敵の殲滅だが、それも劣勢に立たされた状況では見込めない。

(時間をかければ、もっと追い詰められる……)

銃声は止まず、隠れている木に銃弾が当たっていき、剥がれた木片がけたたましい音とともに飛び散る。

「ユウキ……っ!」

別の木の陰に隠れているミユキが、切羽詰まったように声をかけてくる。

(……くそ——っ!)

「俺が突っ込む! ミユキは援護してくれ……っ」

これ以上考えている時間はない、とでも言うようにユウキは大きな声を上げる。それを聞いてミユキは、

「え、ちょ……っ!？」

「それしか方法がないだろ! 合図するからな——っ」

驚いた表情を見せるミユキに、ユウキは視線を向ける。その目を見て、ユウキは本気だと判断したミユキは覚悟を決める。

「一発で決めてよね」

「わかってるよ。いくぞ——っ!」

ユウキは相手の銃声が止む瞬間を待つ。交代で攻撃をしているのなら、スキをつくにはその一瞬しかない。タイミングを間違えれば、真正面から銃弾を浴びることになる。その緊張感からか、ユウキは深く深呼吸を行う。

（大丈夫、大丈夫……。できるはず——）

そう強く自分へ念じて、ユウキは隠れていた木の陰から飛び出す。「……っ!？」

急に飛び出してきたユウキに驚いた男たちは、改めて銃口をユウキへと向け直す。その一瞬をユウキは見逃さない。

「今だ——っ!——!」

まだ木の陰に隠れているミユキに聞こえるように、ユウキは大声で合図を送る。

「わかった——!——!」

ユウキの合図を聞いたミユキも木の陰から飛び出し、右手を開いて真っ直ぐユウキの背中へと差し出すように向ける。

「女も出てきたぞ!」

ユウキに次いで飛び出したミユキに気付いた男の一人が、ミユキにも拳銃の銃口を向ける。しかし、それよりも早くミユキは行動を起こす。

「はああっ!——!」

短い掛け声とともに、ミユキは全神経を開いた右手へと集中させる。

「……っ!？」

すると、その右手から強烈な突風が生み出される。

その突風はビュウウウウツというけたたましい空気を切り裂く音を響かせながら、真っ直ぐ先にいるユウキの背中へ直撃する。

「……っ!」

その突風を受けたユウキの身体は風の力でふわりと浮きあがり、走るよりも速くユウキの身体を男たちへと吹き飛ばす。

「な……に——っ!——!」

突風を全身に受けたユウキの突撃に気付いた男が驚いた声を上げるが、その時にはユウキは男の眼前へと迫っていた。

「……………!?!」

「おらあああッ!!」

強風を全身に受けたユウキの攻撃は、さらに威力を増して重いものになる。それを男はかわすことも出来ずに顔面に受ける。

「があああああ——っ!!」

ユウキの攻撃を受けた男は為す術もなく吹き飛ばされていく。

「ち…………っ! こいつ——」

味方の男が吹き飛ばされたのを見て、別の男がユウキへ牙をむく。すぐに拳銃を発砲するが、銃口を向けている間にユウキの姿がいなくなっていた。

「な…………っ!?!」

「後ろだよ——」

驚いている男に、ユウキは声をかける。その声を聞いた男が振り向く瞬間を狙って、回し蹴りを見舞う。

「ぐ…………っ!!」

ユウキの回し蹴りを受けた男は、頭を強く揺さぶられその場に倒れる。一蹴りだけで大の男をノックアウトしたのだ。

「はああ…………」

ミユキが放った強風を受けたユウキも身体にダメージがないわけではない。強い風圧を伴う風は身体を襲う凶器にもなる。その風を受けたユウキは身体が軋んでいる。

「身体がギシギシ言ってるやがる——」

（もう一度同じ手を使うのは無理か…………）

悲鳴を上げている身体を庇うようにユウキは脇腹に手を当てていると、

「一度引け——っ」

男が二人も簡単にやられたことを見て、スピーカーの声の男が命

令を下す。その声を聞いた残りの男たちは、一度ユウキたちから距離を取って様子を見る。

「……？」

その行動を不思議に思ったユウキは、いつでも相手の攻撃をかわせるように身構える。しかし、その攻撃はユウキの予想をはるかに超える範囲で迫ってくる。

「全部まとめて燃えちまえ——！！」

「げ……！！？」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオという地響きのような音を放ちながら、再び火炎放射器が火を吹く。

予想の範囲を超えた攻撃だったため、ユウキの反応が一瞬遅れる。その一瞬で火炎の塊はものすごい速度で迫る。反応が遅れたユウキはかわすことができない。

「ユウキ——っ！！」

身体が動かないでいるユウキに、ミユキが後ろから大声をかける。
「は——っ！」

その声を聞いて、ユウキの意識が火炎の塊から外まで広がる。

視界が広がったユウキは、迫る火炎を寸前のところで回避する。

その回避の方法に、スピーカーの声の男は驚愕する。

「な……！！？　なんだ、いまの——？」

ユウキの回避行動は、迫る火炎を横に走ってかわすというものではなく、その場から消えるように、一瞬の間に別の場所に立っているというものだった。

（やはり、この二人は『覚醒者』——）

その回避行動を見て、スピーカーの声の男は自身の予想を確信させる。

「もう一度放射の準備を。今の動きを見れば、やつらが炎程度で死なないのが分かっただろう！」

その確信を得て、スピーカーの声の男はさらに火炎放射を再度行うよう命令を出す。その目には強い愉しみの色があった。

「ユウキっ！」

「大丈夫だ！ それより、あの火炎放射器なんとか出来ねえか！？」

「まともにぶつかって鉄の塊壊すことなんてできないよ……っ！」

火炎放射器がある限り、不用意に相手に近づくことができない。

逃げ切ることよりも相手を沈黙させることを優先しようと考えたユウキはまず火炎放射器の無力化を狙うが、そう簡単に壊せれる代物ではない。

（やっぱりか……。どうすれば——）

ここは郊外にあるそれなりの大きさの公園だが、入り口は先ほどからユウキを捕まえようと躍起になっている男たちの後ろにあり、ユウキたちの後ろは二メートルを超える金網が公園全体を囲っている。金網を超えることもできるだろうが、その間に狙われたら意味がない。

ユウキがどう突破するかを考えていると、火炎放射器の準備が整う前に男たちがユウキを捕まえようと再度突撃をしかけてくる。

「危ない——っ！」

ユウキがまた狙われているのを見て、ミユキも公園内の繁みから飛び出す。

「ば、馬鹿——」

飛び出してきたミユキを見て、ユウキは大声をあげる。ミユキまで出てきたら、二人とも格好の的になってしまうのだ。当然突撃してきている男たちも、ミユキも標的として飛びかかる。

「こんなやつらなんか、やられるかああ——！」

「ぐわああ——っ」

「がああ……っ」

飛びかかってきている男二人もカウンターでなぎ倒すミユキを見て、ユウキは恐ろしさで背中を震わせるが、一息をついている場合ではない。

「お前まで飛び出してきてどうすんだよ！？」

「だって、ユウキが危なそうだったから……」

「ち……っ！ こいつら——」

「それなら陰から援護してくれりゃよかったのに——」

「い、今さらそんなこと言っても仕方ないでしょ！」

ユウキとミユキは会話をしながら、捕まえようと迫ってくる男たちの手をかいくぐり倒していく。

（生身の人間じゃ歯が立たないか……）

その様子を火炎放射器の隣でじっと見つめているスピーカーの声の男は、部下である男たちがやられていく姿を見ても動じない。

「準備はまだか？」

「あと一〇秒ほどでできます」

「よし、あいつらが手こずっている間に焼き切るぞ」

「仲間も被害に遭いますが……？」

「だからこそ、だよ。ユウキがこちらに意識を向けていないうちに放つのだ。やられる味方は私は知らない。全ては計画のため——だろ？」

「は、は——っ！」

スピーカーの声の男は非情な命令を下すが、それは自身に課せられている命令を遂行するためであり、計画のためだ。命令を受けた男も一瞬躊躇するが、その真意を悟ったかのように仲間を見殺しにする決断をする。

その遠くでユウキは打開策をひらめていた。

「そうだ、さっきの風で火炎放射器を吹き飛ばすことは？」

「んー…あの鉄の塊がどれくらいの質量なのか分からないからなるとも——」

ユウキの提案もミユキは渋い表情で返す。

「そうか……」

「……けど、やってみる価値はあるかもね——っ」

突撃をしてきた男たちを全員沈黙させたユウキとミユキは、公園の中央に陣取っている火炎放射器を睨む。その砲口はまたしても火

炎放射のために、準備をしているのだろう。

「こつちも時間がかかるから、その間まかせたわよ!!」

「あ、ああ——」

強気なミユキの言葉を聞いて、ユウキも改めて相手を見据える。

そして、今度はユウキの方から相手に向けて突撃を行う。

「考えもなしに真正面から突っ込むか——。青いな!!」

ユウキの突撃を見てスピーカーの声の男は鼻で笑うが、ユウキには聞こえていないだろう。余裕の表情のスピーカーの声の男を見て、さらに突撃の速度を上げる。

（その鼻っ面をへし折ってやる!）

「準備いいよ、ユウキ——っ」

「用意整いました!!」

そこに、それぞれ準備完了の声が届く。

「放て!!」

「俺ごとやれっ」

それを聞いてユウキとスピーカーの声の男が同時に声を上げる。

その指示を受けたミユキの手から再び強烈な風が生み出され、火炎放射器の砲口の奥が凄まじい熱を帯びていく。その間もユウキは相手との距離を詰め、火炎放射が放たれないように砲手へと突撃をかける。

「ユウキを放射線上にもっていきけ!」

突撃の方向を見て、ユウキの狙いに気付いたスピーカーの声の男は近くにいる部下の男に命令を出す。命令を受けた男はライフルを構えながら、ユウキの突撃を止めるために前に出る。

（な……っ!?!）

突然前に出てきた男の動きに、ユウキは戸惑ってしまう。常人の走りを超える速度で走っているユウキは、その途中で止まることや角度を変えることはできない。このままでは、そのままぶつかるしかなく、さらに男はライフルを構えているため力ウンターで撃たれる可能性もある。

近距離の銃撃ですでに左肩を銃弾がかすめているユウキの心に、その恐怖が再度湧き上がる。

「そこで飛んでっ！！」

ユウキのその一瞬の躊躇いを見たミュキが、後ろから叫ぶ。

「……っ！？」

ミュキの声を聞いて、ユウキはその場でジャンプする。そこに、いつけええええええ——っ！！——

ミュキが放った強烈な風が火炎放射器へ向けて、一直線に放たれる。それとほぼ同時に火炎放射器の砲口から一際大きな火炎の塊が放たれようとする。

しかし、それよりも先に強風が公園を分断するように吹き通る。その風は砂塵を捲き起こし、ジャンプしたユウキやスピーカーの男、さらにはその部下である男たちも巻き込んでいく。

ビュウウウウウウウツというけたたましい強風特有の音が公園内に響きわたり、火炎放射器の火炎が放射される直前に、火炎放射器そのものを持ち上げている。

「な……っ！？」

その光景を見て強風にもまれているスピーカーの声の男は驚愕の声を漏らし、砲口が持ち上がった火炎放射器から放たれた火炎が空中へとジャンプしていたユウキへと向けられ、火炎が放たれる。

ゴオオオオオオオオオオオオツ！！！！

という周囲の空気が焦げるような音と匂いを撒き散らし、火炎はユウキへと一直線に飛んでくる。

「う、うそだー……」

ユウキが次の言葉を言う前に、ユウキの身体が火炎と衝突する。「があああああ！！」

その火炎を受けたユウキの背中にさらに強風が吹き荒れ、火炎とともにユウキも吹き飛ばしていく。そして、次の瞬間、公園内に大爆発が引き起こされる。

「ユウキい——っ!!」

郊外の公園内に響きわたる爆発音とともに、ミユキの叫び声が響く。

しかし、引き起こされた爆発のけたたましい音とまき上がった粉塵に、その声も掻き消されていく。火災とともに強風に飛ばされたユウキは、公園内のどこかに吹き飛ばされたのだろう。ユウキを捕まえようとしていた男たちも同様でそれぞれがミユキの放った風に巻き込まれ、ばらばらに倒れている。

夜はまだ更けたばかりで、これからさらに暗闇の世界が広がっていく。

しかし郊外にあるこの公園では、昼かと紛うほどの明るさを放ちながら、公園内の木々が火炎に飲みこまれ、爆発音が周囲の住民を起こしかねないほどにけたたましく響き、撒き上がる粉塵が夜空を雲よりも厚く隠していく。

まだ、夜は更けたばかりだ。

序章 交わりの始まり？

夜空に吸い込まれるように、黒煙が空高く上っていく。ついで焼けるような匂いが、辺りに充満している。

それらは、先ほどの爆発によるものだ。

地面が大きく揺らぐほどの爆発は巻き上げられた粉塵と火炎の衝突によって、引き起こされた。いや、強烈な風とともに巻きあがった粉塵が火炎放射器を飲み込み、無理矢理放射された火炎が火炎放射器の内部爆発を引き起こした、と言うのが正確だろうか。

どちらにせよ、公園の一带が爆発の影響で悲惨な状況と化していた。

「……逃げられたか」

その状況を眺めながら、スピーカーの声の男はぼつりと呟く。

先ほどまで捕まえようと必死に追っていたユウキの姿はすでにない。一緒にいた少女——ミユキと呼んでいた——とともに、どこかへ消え去ったのだろう。

「も、申し訳ありません。私のせいで——」

そこに、捕まえ切れなかった男が謝りに来る。

「いや、仕方がないさ。向こうが『覚醒者』と分かっただけでも上出来だ。これでさらに対策が練れる」

ユウキを捕まえ切れなかったことに、スピーカーの声の男はそれほど悔しさを見せない。悲惨な状況へと変化した公園の中で、スピーカーの声の男はおもむろにタバコを吸い始める。

「『覚醒者』、ですか……」

『覚醒者』という単語を聞いて、謝りに来た男は声を震わせる。その男の震えを感じてスピーカーの声の男は、

「そうと知っていれば、対処することにはそれほど困らん。むしろ我々の計画への必要性がより高まったというだけだ」

震え上がる男をよそにして、スピーカーの声の男はニヤリと笑みを浮かべる。それには自身の見立てが間違いはなかったことへの嬉しさが滲み出ている。その笑みを見て、男はさらに震え上がる。『覚醒者』に立ち向かうことに恐怖よりも嬉しさを覚えている、といった表情は見る側には獲物を狩る獰猛な肉食獣にしか見えない。

「では――」

「無論だ。奴らはそれほど遠くへは行っていないだろう。すぐに追いかけるぞ」

「はっ！」

スピーカーの声の男は、依然として残り火が燃える公園の後にして、ユウキたちを再度追いかける。

街灯の明かりが点々と夜の街を照らしている。

その明かりに沿うように、ぼつぼつと地面に血痕が残されている。血痕はユウキのものだ。

「はあはあ……」

夜の街を歩いているユウキは爆発の影響で腹部に傷を負い、ミユキの肩を借りてなんとか歩いている状態だった。

「くそ……っ」

そのミユキは額に汗をにじませながら、先ほどの男たちから一歩でも逃げようと必死に歩いている。しかし、その肩にはユウキの手が回されていて、とても重そうだ。

「無理するな……。俺を置いて行けばいい」

ミユキを心配するユウキの声はとても小さい。

「はあ……！？ 何、馬鹿なこと、言ってるのよ。ここでユウキを置いて私だけ逃げたら、身体を張った意味がなくなるでしょ。それに、ユウキも、あいつらなんかには渡さない――っ！」

途切れ途切れの言葉にも、強烈な意志が込められている。ミユキ

の意思は最初から変わっていない。ユウキを決して狙ってくる奴らには渡さない、というその一心でここまで身体を張っている。それはミュキの、ユウキへの恋心と重なっている。

「けど、ミュキまで捕まったら元も子もないだろ……」

「そんなヘマはしないよ。私も、ユウキもあいつらには捕まんない。捕まえさせない——っ」

力強い言葉とともに、ミュキは一步步つ前へと進む。立ち止まることは、それだけ相手との距離が開かないということだ。

ミュキが歩いている場所は、住宅街の中のような。周囲には一軒家がずらっと並んでおり、物静かな様子は、硬質感が漂う建造物ばかりの市街地よりも増しているようだ。

それらの住宅はすでに明かりが消されており、静まり返った夜の街を象徴している。

「はあはあ……」

その夜の住宅街に、ミュキの息遣いが響き渡る。

「だから、無理すんなって——」

ミュキの肩に手を回して身体を預けるようにして歩いているユウキは、ぽつりと声をかける。その声色は依然として弱い。

「それはユウキも同じよ。何も自分だけを犠牲にしなくてもいいじゃない……」

「俺自身に関わることだ。お前を巻き込みたくないんだよ」

「今さら何言ってるのよ。私が自分から首を突っ込んだことだもん。途中で投げ出すなんてしたくないの」

ユウキの本音を聞いても、ミュキは引き下がろうとしない。

（そうよ。私が好きで飛び込んで行ったんだもん）

自分の意思を確認したミュキの決意は固い。それを止める術を、ユウキは知らなかった。

足を休めずに歩くミュキの呼吸は次第に荒くなっていく。すでに二〇分近くは歩いたはずだが、皮膚を伝う緊張感は未だに解けない。まだ先ほどの奴らが近くにいることを、その本能が知らせているの

だ。その緊張感のまま、ミユキは住宅街の十字路へさしかかる。

それを証明するかのように、夜の帳が降りている住宅街に無数の走る足音が響きわたっている。こんな時間に足音が響きわたること自体が異常と言えるだろうが、聞こえてくる足音は次第にはっきりと聞こえてくる。

（追いついて来たのかな……）

聞こえてくる足音に、ミユキは耳をすまして集中する。

目の前の十字路のどこから聞こえてくるのかを判断しようとしているのだが、ユウキや自身の呼吸音、肌を刺すような緊張感が集中力を鈍らせる。

「足音は間違いなく奴らだな——」

もっと意思を集中させようとミユキが頭を振っていると、ユウキが小さく言う。どうやらユウキも気付いたようだ。

「どうしよう……？」

「引き返すのがベストかもしれないな。けど俺の血が地面には垂れてる。先回りされたのかもしれない……」

そう推測するユウキは渋い表情をしている。自分の不注意が招いた結果だと考え、自身に対して憤っているのだろうか。

「そんな……。ばれないように住宅街を縫うようにして歩いてたのに——」

「それでも相手の数と速さには敵わないさ。爆発が起きる前の時点で、まだ八人は生きてたんだからな」

「そんな数くらいなら、私でも十分倒せるよ？」

ユウキは住宅の塀に寄り掛かるようにして、少し足を止める。その身体を相変わらず支えているミユキの息は上がりっぱなしだ。そのような状態でも、ミユキは大人の大人八人を倒せると断言する。

その発言は間違いではないだろう。先ほどのミユキの戦いっぷりはとても少女のようではなかった。さらに、数人の男に囲まれても軽々といなしていたのだ。八人ならまだ許容範囲であるのだろう。

「相手が単純ならそれでいいかもしれないが、八人全員で迫ってく

るわけでもないだろう。分散してるだろうし、何より応援が来てもかもしれない。相手の素情が分からないんだ。あらゆる可能性を考えるべきだろ？」

追ってきている敵全員を倒そうといきり立っているミユキに、ユウキは冷静な言葉を掛ける。腹部を押さえているユウキの左手は真っ赤に染まっていた。

「そうかもしれないけど……。このまま捕まるのだけは避けないと――」

「それは分かっている」

周囲への注意を怠らずに、ユウキは思考を巡らせる。傷を負った状態でなければ、逃げることは軽々と出来たかもしれない。今さら嘆いても仕方ないことだが、そう考えられずにはいらなかった。

足音はだんだんと大きくなり、それに次いで会話も聞こえてくる。
(すぐそこまで来てるな……)

そう判断したユウキは、ミユキとともに住宅街に設けられているごみ収集場の陰にひとまず隠れる。

「そっちは？」

「いなかった――。血痕はこの先にはない。やはり引き返したんじゃないのか？」

「そのはずはない。そのまま血痕を追っている味方とさっき会ったが、発見していないと報告してきた」

「じゃあ――」

「この住宅街にまだいるってことだ。それほど大きい住宅街じゃないんだ。各ブロックごとにあてれば、すぐに見つかるさ」

聞こえてきた声は次第に小さくなり、足音もそのまま通り過ぎていく。

(そのまま突っ切っていったのか――?)

会話の声や足音が聞こえなくなったことに、ユウキは不信感を露わにする。間違いなくこっちに向かってきていた声や足音はぴたりと止んだ。

「どうしたのかな……？」

隣にいるミユキも不思議そうに言う。

「十字路を突っ切ったんだろうな。恐らく俺の血痕は気にせずに、先回りを命令された連中なんだろう」

ということとは後ろから追ってきている奴らもいる、ということだ。

そして、それは聞こえてきた会話の内容からも間違いないだろう。

「そんな——！？」

「まあ向こうにとっちや、それが一番の手だろ」

「どうしよう……」

二人の声が止まる。

前に進めば、先ほどの連中とぶつかるかもしれない。引き返せば、追ってきている連中とぶつかるかもしれない。正面衝突をして負けるとミユキは考えていないが、今の目的は追ってきている奴らを倒すことではなく、捕まらないように逃げることだ。

その目的を達するには、ユウキが負っている傷はあまりにも重い。出血はハンカチを破いて止血したが、失った血の量はとても多い。立っているだけでもユウキには苦痛な状態だろう。

「……」

（どうすれば——）

「……」

（私だけでも敵を倒す自信はある。けど、その間にユウキが捕まったら元も子もない。もうこうなったら——）

ユウキもミユキも声を発しない。再び静まり返った住宅街に、二人の息遣いだけが虚しく響く。

しかし、この場にじっとしていることはできない。後ろから男たちが追いかけてきていることは間違いないのだ。

「ね、ねえ、ユウキ——」

意を決したように、ミユキが口を開く。

「……？ どうした？」

「ここで捕まるのだけは避けられないいけないよね……？」

「？　ここまで来たら、な」

そのユウキの言葉を聞いて、ミユキは肩にかけていたバッグから手鏡ほどのサイズの丸い円盤型の機械を取りだす。

「お、おい！　それは——っ！？」

手のひらに収まるサイズのその機械を見て、ユウキは目を見開いて驚く。

その円盤型の機械は、少し丸みを帯びた淵から中央のボタンのような仕掛けまで、全てが鈍い銀色を発している。パツと見ただけではどのような機械かも分からないが、それを一番間近で見てきたユウキには一瞬で分かった。

「うん。何かあった時に役に立つかなって持ってきてたの」

「それを使っつていうのか！？」

「ユウキが捕まらないで済む一番の方法——そうでしょ？」

「そうかもしれないが……っ！　それはまだ——」

「そうも言っつてられないでしょ？　こうしてる今も、あの男たちが追いかけてきてるなら、こうすることが一番だと私は思うの」

そう言ったミユキはユウキの同意も得ずに、円盤型の機械の中央にあるボタンを押して、機械をそばにある住宅の塀に押しつける。

すると、円盤型の機械は眩しいほどの強烈な光を放ちながら、丸みを帯びた淵が円状に広がっていく。

「……っ！？」

あまりの眩しさに、ユウキもミユキも手で光を塞ぎなくなるほどに目を細める。

淵が広がるとその眩しさは次第に弱まっていき、そのうちまた元の鈍い銀色の光沢だけが残る。しかし、円状に広がった淵の中は薄暗い霧が渦巻くように漂っていた。その中だけ別の空間のように思える。

「これが『タイム・ドア時空扉』——」

円盤型の機械は、時空を飛ぶための機械——『タイム・ドア時空扉』だった。起動した円の内に入れば、平行世界に飛ぶことが出来る機械だ。

この機械を使い、現在の世界とは別の時間を進んだ平行世界へ飛ばす、ユウキは捕まらないで済む、という最後の手段だ。

「お、おい……。本当に使えていいのか？」

ミユキはユウキを『タイム・ドア時空扉』の前に無理矢理といった感じで立たせるが、円の中に飛び込むことをユウキは躊躇する。

「なんで躊躇うの？」

そのユウキの反応を、ミユキは不思議そうに尋ねる。

「なんでって――」

目の前にある時空への扉は霧が渦巻いている状態にしか見えず、その薄気味悪さは尋常ではない。それだけでも飛び込むことは躊躇いそうになるが、ユウキが躊躇する最大の理由は別にある。

「ここで躊躇してちゃいけないよ！ 前に行っても後ろに行っても、じつとしててもあいつらに見つかるんだよ？」

「だからって、いきなり時空を飛ぶのは――」

必死になっているミユキにユウキは『タイム・ドア時空扉』の使用は考え直そうと言おうとするが、

「もう――っ！ ここでジタバタしてるよりは絶対マシなんだって！」

の一言とともに、『タイム・ドア時空扉』の円の中へと背中を押される。

「え……っ！？」

急に背中を押されたことに驚き、また押されたことにより自身の身体が円の中に飛び込んで行こうとしていることに、ユウキは間抜けな声を上げる。

時間がその時だけゆっくりと進んでいるかのように、あるいはコマ送りの映像を見ているかのように、身体が円の中に入るまでの一秒足らずの時間をユウキは途方もなく長く感じてしまう。

「おい！ ミユ――……」

最後の一言は途切れて、ミユキまで届かない。

「ばいばい……っ」

消えていったユウキにミユキは別れの言葉を言う。その表情はど

こか寂しげだった。

そのままミユキは起動させた『タイム・ドア時空扉』を元の状態に戻す。これでユウキがいづらに捕まることはないだろう。

（出現座標は変えたし、理論上はこれで上手くいくはず……。あとは代替で現れる人物の確保——ね）

そして振り返って、視線を前へ向ける。その表情は毅然としたモノに変わっていた。

序章 交わりの始まり？

空の真上に昇った太陽の日差しがとても強い。

その日差しから視界を守るように、『かみむらゆつき上村悠生』は手で視界を覆う。

「今日も暑いな……」

長袖のシャツは腕まくりをしており、だらんと首元を緩めた学校指定のネクタイがとても気だるそうな表情を助長させている。悠生が着ているのは、彼が通っている高校の制服だ。

悠生は学校からの帰り道を歩いている。

しかし、まだ下校時間ではない。本来の下校時間まではまだ数時間以上も時間がある。悠生は体調不良を訴えて、授業を早退したのだ。

（こんな暑い日は、家でのんびりとしてるに限る）

そう考える悠生だが、決して仮病を使った常習犯ではない。本当に体調が悪いのだ。

（朝からついてねえよ……）

彼の朝はいたって普通だと言える。それが他の人とはほんの少し違うのは、起きたら家に誰もいなかったということだけだろう。悠生が起きた時間も、登校には十分間に合ういつもの時間であり、寝坊をしたというわけではない。それでも起きたら家に一人だけ、ということは今までも幾度もあった。

「帰ってシャワー浴びよ——」

それが悠生にとってはついてない、ということになる。

そこには、悠生の家庭事情があると言えるだろう。両親の仕事にそれほど関心を持っていない悠生は自身の親が何をしているのかはよく知らない。しかし、起きたら家に一人という状態が何度もあるとさすがにうんざりしてくる。それが少なからず、今の体調が悪い

ということに影響しているのかもしれない。どちらにせよ、今の悠生の気分はとても良いとは言えなかった。

悠生が通っている高校から家までの街並みは、ずっと住宅街が続くなんてことのない道程だ。しかし、悠生は見慣れたその風景に何処か言い表せない違和感を覚える。

(……?)

すぐ目の前にある家の表札も、通るたびに吠えてくる近所の犬も、通り過ぎるときに軽く会釈してくる優しいお婆さんも、何もかも見慣れた風景なのに、悠生は言葉では表現のできない不安を感じる。

「……………」

立ち止まり、ぐるっと周囲を見渡すが、やはり昨日と何も変わっていない——暮らし慣れた街の景色が広がっているだけだ。

「どうかしたの、悠生ちゃん？」

悠生のお婆さんがおかしいと思ったのか、子どもの頃から良くしてもらっているお婆さんが心配そうに声をかけてくる。

「い、いえ……」

「本当……？　なんだか顔色が悪いわよ？」

「あ、ちよつと朝から体調が良くなかったんで、学校を早退したんですよ」

「あら、そうなの？」

上手く会話合わせるように、話をしている悠生の言葉をそのまま信じたお婆さんは本気で心配してくる。

「え、ええ……」

「それは安静にしてない！　お家に着いたら、お薬飲んですぐに横になるのよ？」

お婆さんにとって、小さいころから近所付き合いの一環として面倒を見ていた悠生は孫のような存在である。それ故に、悠生の心配はその家族よりも過度にしてしまう節があった。

「はい、わかってますよ」

心から悠生の身体を案じてくれるお婆さんに、悠生は笑顔を見せ

て答える。お婆さんも、その返事を聞いて安心したように「うん」と頷く。

「それじゃあ——」

そう言つて、悠生はお婆さんと別れる。

再び家路を歩き始めるが、やはり感じた違和感は拭えない。

（空気が違うのか……）

悠生は、そう考える。

雨が降る前や降った後あるいは季節やその日の気温などによって、吸う空気の匂いや感じが微妙に変わっていると思うことがあるように、悠生は空気が違うのだろうか、と推測する。それはあながち間違ひとは言えない。

昨日よりも湿度が高い今日は、生ぬるい空気はうつとうしく感じるだろう。

（何なんだろう……）

感じる違和感に答えを出せないまま、悠生は家路を歩く。照りつける太陽の光は一向に治まらず、かいた汗は不快感を一層に増すように身体を伝っていく。

それから、悠生が家に着いたのは二〇分ほど経った後だった。

玄関のドアを開けようとするが、ガチャガチャという音がするだけで、開く気配はない。朝、高校に行く前に悠生が鍵をかけたままなのだろう。

「……」

（やっぱりか——）

気付いた悠生は仕方なく鞆を漁って、家の鍵を取りだす。そしてドアの力ギを開けて、家に入っていく。

「ただいま——」

家に帰ってきた悠生は一言そう言つが、返事は返ってこない。

（当然……だよな——）

家に帰ってきてても『おかえり』の一言がもらえないことに、悠生は少し虚しくなる。玄関に突っ立っている悠生は自分が抱いた気持ち

ちに気付いて、

（馬鹿らし……。もう子どもじゃないんだし——）

と、靴を脱ぐ。そして、帰宅途中でかいた汗を流そうと浴室へ向かうとする。

「ふわぁ……」

欠伸をしながら、リビングに鞆だけを置いて浴室へ向かうとする悠生はちらつとリビングに置かれているテーブルを見る。そこには朝見かけた置き書きが今もある。当然、家には誰もいない。

（……………）

その書き置きを見て、苦い表情になる。それを振り払うかのように悠生は頭を振って、リビングを後にする。

誰もいない家の中は昼間だというのに、とても暗い。カーテンを閉めているために太陽の光が室内まで届かないということももちろんある。しかし、それ以上に家の雰囲気がい暗いのだ。その家の中に、リビングのドアを閉める音が虚しく響く。

廊下を数メートル歩いて脱衣所へ着いた悠生は、

「はぁ……………」

と、ため息を吐く。さらに体調が悪くなったような妙な感覚を抱きながら、悠生は脱衣所で制服を脱ぎ始める。

脱衣所に設けられている洗面台の鏡に、悠生の顔が映りこむ。覇気のないその表情は、虚ろそのものだ。

（さっさと寝よ……………）

制服を脱いだ悠生は、そのまま浴室へと姿を消していく。鏡には誰も映り込まない。

電球が一つも点いていない家は恐ろしいほどに暗く、生活感を感じることができない。

悠生の家もそうと言えるほどに、家の中に明かりがなかった。それは悠生が朝起きたときには家に一人だったから、というわけではない。日常的に電気が点いていることのほうが少ないのだ。

母親も父親も仕事で家を空けていることのほうが多いのは、悠生が子どもの頃から変わらない。だから、近所のお婆さんが面倒を見てくれた。そのことに悠生は並々ならぬ感謝の気持ちを持っている。お婆さんがいてくれたから、今の悠生がいる、と言ってもいいほどだ。

家を空けていることが多い両親は公務員として仕事をしている。そう聞いたことがあるだけで、どのような仕事をしているのか悠生はよく知らない。単身赴任で父親が県外で数年働くということも経験したことがあるが、それでも悠生の興味を引くことはなかった。

「暗……っ」

シャワーを浴びた悠生がリビングに行くと、先ほどよりもさらに部屋の中は暗くなっていた。太陽に雲でもかかっているのだろうか。あまりにも暗いと思った悠生はリビングの明かりを点ける。悠生が明かりのスイッチを押すと、ずっとほったらかしにされていたかのように電球は鈍い反応を見せて明かりを灯す。

リビングに明かりが点くと、おもむろにテレビのスイッチを点ける。家に一人でいると話し相手もおらず、声が聞きたいがためにテレビを点けるのだ。

「……あ——」

昼のワイド番組を写しているテレビが置かれているテレビ台の端にこそつと置かれている家族の写真に不意に目が行く。まだ悠生が幼く、幼稚園にも通っていない頃の写真だ。幼い悠生は母親に大事そうに抱かれている。

写真には悠生と両親の他に、もう一家族写っていた。その家族の母親も当時の悠生と同一年くらいの子どもの胸に抱いている。

（……誰……だっけ——？）

ずっと気にもしていなかった写真を見て、悠生は写っている子ども

もに意識を向ける。しかし、その子どもが誰だったのか思い出すことができなかった。

「まあ、いつか――」

写真の子どもにそれほど執着しなかった悠生は、リビングのソファに横になってテレビに映っているワイド番組をただ見る。その番組では、『地域観光探訪』と題した観光コーナーを今はやっていた。うとうとと視界が霞んでいき、意識は次第に現実から遠のいていく。このまま寝そうだなあ、とおぼろげに思いながらも悠生はソファから動こうとはしない。

（あ……薬飲んでないや……）

そのことに気付いた時にはもう夢心地の状態で、ソファのふかふかとした感触に悠生は全身が襲われていた。

（まあ、いいや）

リビングの端の壁にかけられている時計の時間をみて、悠生はそう思う。朝飲んだ薬の持続効果はまだあるはずだ。

そう判断した悠生は、今度こそ夢の中に落ちていく。

序章 交わりの始まり

+

太陽も沈んだ夕方は、この季節ではようやく過ぎやすい時間帯になつてきたな、という印象を与える時間である。昼間では歩いているだけで汗をかくということが日常茶飯事だが、太陽が沈めばそれともいくらか治まる。

「ふう……」

その穏やかになつてきた気温の中を、一人の少女が帰宅しようとして歩いている。少女が歩いているのは閑静な住宅街の中だ。他に通りを歩いている人も見当たらない。ずっと先に見える十字路までずっと一軒家が続くような通りは、見栄えの良い景色もなくただ歩いているだけでは退屈でしかない。学校が家から近い、という理由だけで通っている高校を受けた少女は、帰り道の平淡さにとても飽き飽きとしていた。

そこに、四軒先の家から犬の吠える大きな声が聞こえてくる。

（今日は、あそこの犬吠えてるのね）

普段は吠えることのない犬が今日は大きく吠えていることに、少女は疑問を持つ。吠えることもないおとなしい犬として近所で小学生たちから人気のある犬なのだ。その犬が吠えていることは珍しいというよりも、初めて見ることに等しかった。

（何かいるのかしら……？）

そのように疑問に持った少女は、そのまま吠えている犬がいる一軒家まで行ってみる。一軒家が近づくほどに、犬が吠えている声は大きくなっていく。

一軒家が近づいてくると、少女は近くの電柱の陰に何かが隠れていることに気付く。

「……？」

（なんだろ——）

電柱の陰に隠れている何かに気を引かれた少女は、恐る恐る顔をのぞかせる。そこにあつたのは、

「……っ!？」

気を失っている少年だった。

(ひ……っ!)

そのことに気付いた少女は悲鳴を上げそうになる。しかし、その直前で、

「あれ、上村くん——？」

少年の顔が、見知ったものであることに気付く。慌てた少女は、気を失っている少年の真正面へと移動する。

(やっぱり——)

少年の顔を真正面から見て、少年が自分の見知っている人物だと少女は再認識する。

(でもどうしたのかしら？ 上村くんは、体調が良くないって早退したはずじゃ——)

そう。

学校のお昼休みには調子が悪いと言って、帰ろうとしている少年の姿を少女は目撃している。体調不良と言い、数時間も前に早退した人が今さら外出をするなんてことはないだろう。

それよりも、少女は少年が電柱に寄りそうようにして倒れていることを不思議に思う。

「上村くん、だいじょう——」

意識があるのか確認するために肩を叩いて声を掛けようとしたところで、少女は気絶している少年の着ている制服が赤く染まっていることに気付く。

「……っ!？」

なんで赤く染まっているのだろつと顔を近づけ、

(血……?)

そう認識した瞬間に、吐き気を覚えて口元を右手で覆つ。

(な、なんで——!?)

大量の出血で倒れているのだと理解して、少女の頭の中で様々な疑問が一瞬のうちに駆け巡る。しかし、それらの疑問はここで考えて分かることではない。

とりあえず少女は少年をこのまま放置しておくのは駄目だと判断して、少年の手を肩に回して家まで連れて行く。

少年の意識は、戻らないままだった。

第一章 世界が変わった時 ？

ふわふわとした感覚が悠生^{ゆうき}の全身を包む。

それはとても気持ち良くて、いつまでもその感覚を味わっていた
いと思えるようなものだ。しかし、ずっとその感覚を味わっている
ことが出来ないと分かるような感覚でもある。

「……ん——」

吐息が自然とこぼれる悠生は、やわらかい感触のベッドに横にな
っている。その感触が悠生の感覚を誘導しているようだ。

ふと目を開けると、悠生がいたのは白を基調とした部屋の中だっ
た。

「眠ってたのか……」

意識がまだはつきりしない悠生は、虚ろな目で部屋を見渡す。す
ると、その部屋が見慣れた高校の保健室だと気付く。

（あれ、なんで俺、保健室なんか——）

状況が理解できない悠生は、記憶を辿ろうと思考を巡らせたところ
で、鈍い頭痛を感じた。

「……っ！」

不意に感じた頭痛を抑えようとするように左手で頭を押さえる。
そこに、

「大丈夫か？」

悠生を心配するような声が聞こえてきた。

「……？ 拓矢……それに葵も……」

声をかけてきたのは、クラスメートである『吉田拓矢^{たくや}』だった。
その隣には、同じくクラスメートの『飯山葵^{あおい}』もいる。

「どうしたんだ、俺？」

「覚えてないのか!？」

悠生の発した言葉に、拓矢は驚いたような声を上げた。

「？ あ、ああ……」

「授業中に急に倒れたんだよ、お前……！」

「……倒れた……？」

少しずつ覚醒していく脳で、悠生は拓矢の言った内容を理解する。しかし、自分が倒れた、ということには疑問を覚えた。

（俺が、倒れた……？）

「全くびっくりさせやがって。先生は貧血だろうって言ってたけど」「ほんとだよ。すっごい心配したんだからねっ」

拓矢と葵は、それぞれ悠生の身を案じてくる。そのことに悠生は感謝しながらも、目が覚めたら保健室で横になっていたという状況を必死に整理しようとする。

（おかしい……よな……。体調が悪くて、昼には早退したんだし……）

保健室の壁にかけられている時計を見ると、針は夕方になろうとする四時過ぎを指している。

（四時……っ！？ 俺が家で寝ようとした時間と――）

悠生は体調不良で授業を午前だけ受けて早退したと家に戻ったら早めにベッドに横になったことをはつきりと覚えていた。その時間が記憶の中では、四時だったのだ。

（これはどういう――）

自らの記憶と現実が一致しないことに、悠生は困惑した。

「どうした？」

そこに、悠生の様子がまだおかしいと感じた拓矢が心配そうに言った。しかし、その拓矢の表情ですら、困惑した悠生には恐く感じてしまう。

「い、いや――」

目覚めた自分の状況が未だに飲み込めない悠生は、歯切れの悪い返事を返すことしか出来ない。はつきりと覚えている記憶が、今の現実をさらに困惑したものへと変えている。

「ほんとに大丈夫か？ どうか頭打ったとかじゃないよな？」

「いや、そうじゃないけど——」

身を乗り出して心配してくる拓矢の表情は悠生のことを心から心配しているかのようだが、状況が把握できない悠生にはその混乱を助長させるものでしかない。

「私、先生呼んでくるねっ」

その拓矢の横に座っていた葵が、悠生が目覚めたことを保健の先生に報告しに行こうと立ち上がった。

「ああ、任せた」

そう言つて、葵が保健室から出ていくところを拓矢は見とどけて、もう一度悠生のほうへ向き直る。

「五時間目の現文の授業の時に倒れたんだよ。ほんとに覚えてないのか？」

「あ、ああ……」

「まあ、あんな倒れ方じゃ無理ないかもな。もうちよつと安静にしてろよ。その内、葵が先生連れてくるだろうしさ」

起き上がるとしている悠生に対して、拓矢はまだ横になっていると言う。たしかに頭痛はまだするとはいえ、悠生はそれほど深刻な状態ではない。そもそも現在の状況を把握したいがためにベッドから起き上がるとしているのだ。

（学校で間違いはなさそうだな……二人とも制服だし——）

けど、と悠生は思う。悠生の記憶では学校には午前中までしかいなかった。それは間違いのないことで、今が午後四時過ぎであることが理解できない。誰かのいたずらかとも思うが、家に帰ったことも覚えているので、いたずらにはあり得ないだろう。

（となると、考えられるのは——）

そこまで考えたところで、保健室のドアが開けられる。

「先生呼んできたよ！」

開けられたドアからは先ほど保健室を保健室を出ていった葵と白衣を着た腰まで届きそうな長い髪が特徴的な化粧でしっかりと作られている顔の『真田佳織^{かおり}』先生が入ってくる。佳織先生は保健の先

生だ。

「真田先生！」

「どう？ 上村くんの容体は？」

拓矢の声に気付いた佳織先生は、悠生の身体の調子を尋ねた。

「さつき目覚ましたんですけど倒れるまでのこと覚えてなくて、まだ調子悪いのかなって思っ——」

「そう……」

拓矢から悠生の容体を聞いた佳織先生は保健室の壁に設置されているロッカーから、薬の瓶を取り出す。

「拓矢、だから俺大丈夫だって——」

「そう無理すんなって！ 今日はもうこのまま授業もここで休んでるよ」

依然としてベッドから起き上がろうとしている悠生に、拓矢は授業も欠席することを勧めてくる。

「そうね。あんまり無理しちゃいけないわよ」

それに、佳織先生も同調した。

「とりあえず、はい」

そう言って、佳織先生は薬とコップに入った水を差しだしてくる。

「？」

「頭痛薬よ。頭痛いんでしょ？」

「あ、ありがとうございます」

（なんで分かったんだ……？）

疑問に思う悠生だが、差し出された薬をとりあえず水と一緒に飲みこむ。

「それ飲んで、もう一回寝なさい。次起きた時は身体もすっきりしてるでしょ。あなたたちも看病してくれてありがとうね」

「い、いえ」

「私たちは悠生が心配で……」

佳織先生に感謝の言葉を言われて、拓矢と葵はそれぞれ恐縮する。二人のその表情を見て、悠生は小さくため息を吐いて、ベッドに横

になる。

（どっちにしろ、二人が心配してくれてるのは本当か――）

「あなたたちもそろそろ教室に戻りなさい。次の授業が始まる時間でしょ？」

「はい。それじゃ悠生、俺たち教室に戻るから」

「あ、ああ。ありがとうな」

「気にすんなよっ」

二カッと笑顔を見せて拓矢は葵と一緒に保健室から出ていく。その拓矢と葵を見て佳織先生が、

「いい友達ね」

「え、ええ。ずっと二人が看病してたんですか？」

「ん？ そうじゃないけど、休憩時間とか私が少し席を外してる時は二人があなたのそばにいたのよ」

「そう……ですか……」

そう言って、悠生は飲んだ頭痛薬の効用が自然と眠りについていく。

再び訪れる眠りは先ほどと同様にふわふわとした感覚を全身にもたらし、安堵感に満ちた幸福な眠りへと誘^{いざな}う。

意識がある、どの世界が現実なのか分からなくなるほど、それは深くゆっくりとした速度で悠生を導いていく。

第一章 世界が交わった時 ？

「……い……。め……。よ」

悠生^{ゆうせい}の意識の遠くの方で、誰かの声がする。

そのようにぼんやりと感じて、悠生の思考がだんだんと回復していく。重たい^{まじだ}瞼^{まぶた}をゆつくりと開けていくと、そこは知らない景色が広がっていた。

（さっきのは、夢——？）

「おいっ、目を覚ませよ！」

「やめてって……。！ こっちに飛ばされたばかりで、きつと身体が疲れてるのよ」

「そんな悠長に構えてられないんだぞ？ こいつには早く起きてもらわねえと——」

目が覚めた景色の中で、遠くから少年と少女の声が聞こえてきた。意識が戻る寸前に聞こえていた声に間違いない。

（こ、こは——）

悠生は見えているこの景色がどこなのか判断できない。見える範囲^{すず}のもの全てが煤^{すす}こけたような暗い色合いの空間だった。目が覚めても、悠生の脳が覚醒するまでもう少し時間がかかりそうで、悠生はそこが部屋であることに気付かない。しかし自分がベッドに横になっていることだけは分かった。

そこに、

「お！ ようやく目覚ましやがったな」

「ちょ……。っ！？ そんな荒っぽく言っちゃダメだって！」

先ほどから言い争いをしていた少年と少女が声を掛けてきた。自分に掛けられた声を聞いて、悠生は顔だけを声が聞こえてきたほう

へ向ける。そこに立っていたのは、

「拓矢……っ!？」

「あん？」

急に返された言葉に、少年は戸惑いの声をあげた。

しかし、悠生にはその顔に見覚えがある。というよりも、クラスメートの拓矢で間違いがない。その隣にいる——先ほど少年と一緒に声をかけてきた少女の顔は見覚えがなかったが、クラスメートの顔を忘れる悠生ではない。しかし、その少年が着ている制服は、悠生が通っている高校のものとは違っている。

「ど、どうしてここに……。ていうか、ここはどこだ……？」

そう言っただけで起き上がった所で、不意に鈍い鈍痛が走る。

「痛……っ」

急に感じた頭痛に、悠生は不思議な感情を抱く。

（あ……れ……、この感じ前にも——）

「何言っただ、おまえ？」

悠生が言いようのない疑問を抱いているところに、少年は意味がわからないというかのように言ってきた。

（……？）

少年の言葉を聞いて、悠生は困惑してしまう。

現状を確認すると、悠生はベッドのようなものに横たわっている。気付いたら、ここに寝かされていたという感じだ。そして悠生がいる空間は、悠生が見たこともない部屋である。壁や床、天井が全て煤こけた暗い印象を与えてくる硬質感が溢れる空間だ。

そして、その部屋には悠生の他に、三人の男女がいた。一人は先ほど悠生に声を掛けてきた少年であり、悠生が拓矢と声をかけた少年だ。さらに二人いる少女の内、一人は少年と言いつ争いをしていた少女であり、言葉から悠生の身体の心配をしているようだ。最後に残った少女は部屋のドアの辺りに佇んでいる。

「あれ、葵あおいじゃないか……!？」

周囲をゆっくりと確認するように見て、そのことに気付いた悠生

はまたしても驚いた声をあげた。部屋のドアに佇んでいる少女の顔がやはり見知った顔であったからだ。その少女も少年と同じ制服を着ていて、デザインから同じ学校のものだろう。

（拓矢と葵がなんでここに——？ それよりもここは部屋……？
どこの部屋だ！？）

悠生の頭に、次々と疑問が浮かんでくる。なぜ自分はベッドに横になってるのか、この部屋はどこなのか、拓矢と葵がなぜいるのか、その二人が着ている服がなぜ悠生が通う高校のものと違うのか。

それらの答えを求めるように、横になっている悠生のそばにいる少女へ視線を向ける。

「全てを話して、あなたは信じてくれる？」

意味深にそう言う少女の表情は悠生の身を案じているようで、さらに質問に対する真剣な答えを求めているようだ。

「……………」

その少女の表情を見て、悠生はすぐに言葉が出てこない。

（全てを話して——？ どういうことだ……？）

少女の言っていることが理解できなかった、ということもある。

悠生の疑問はここがどこなのかであり、自分はなぜ横になっているのか、そして拓矢と葵がなぜここにいるのか、ということだけだ。しかし、少女の言葉からはそれ以上の何かがあるような気がする。

そう悠生は自然と思った。

ベッドに横になっている悠生は上半身だけを起こして、少女の顔を真正面に見据えて尋ねる。

「全て——ってのは、どういうことだ？」

「言葉のままよ。あなたがここにいる理由、私たちがあなたという理由、この部屋がどこのなのか、この世界がどこののか」

（この世界……っ！？）

少女の言葉に不可解なワードがあったことに、悠生は気付いて訝しんだ。この世界、とはどういうことなのだろうか。ただ考えているだけでは分からない。何よりもこの現状を知りたい、という一心

で、

「わかった、信じる……っ」
と、返事をした。

「そう。その返事が聞きたかったわ」

少女は一拍おいて、深く深呼吸をする。これから話すことがとても大事なことであるかのように、悠生の理解が間に合うように。

「まず私はミュキって言うわ。あなたの名前は悠生で間違いないわよね？」

「？ あ、ああ」

何の確認か分からないが、悠生は少女——ミュキの質問に頷く。

「じゃあ悠生、私はこれから話すことについて、何を聞いても驚かずに信じてほしいと思ってるわ。これから話すことは全て真実で事実だから」

「わ、わかった……っ！」

さらに念をおしてくるミュキに、悠生は大きく頷いた。

「今、あなたがいる世界はあなたが暮らしている世界とは全くの別ものよ」

「……？ え——っ？」

ミュキが言ったことが理解できないで、悠生は素っ頓狂^{とんきやう}な声を出してしまう。

「驚かないで、とりあえずそのまま私が言ったことを信じて——！」

「あ、う、うん」

「そうね。仮にあなたが暮らしている世界を現実世界——『リアルワールド』と言ったら、あなたが今いるこの世界は並行世界——『パラレルワールド』、ということになるわ」

^{パラレルワールド}
「並行世界……？」

言っている意味が分からない、とでも言うように悠生は聞き返した。

「そう。あなたが暮らしている世界とは別の時間を辿ってきた世界

のことよ」

驚いた表情のまま固まっている悠生に、ミュキはなるべく優しい声で説明する。

「な、なんで……俺がそんな世界に？」

「まあ、そう疑問に思うでしょうね」

悠生が抱いた疑問も、当然のようにミュキは理解した。

「おい、説明にそれほど時間をかけてられないぞ」

言葉を選ぶようにゆっくりと話しているミュキに、部屋のドアの傍に立っている少年が急かしてくる。

「分かってるわよ。でも、誤解させるような説明もできないでしょ」
横槍を入れてきた少年を一蹴して、ミュキは話を続けていく。

「あなたが、こちらの世界にきた理由は後で説明するわ。まず平行^{ワールド}世界から説明させてもらうわね。あなたは世界が一つしか存在しない、と証明できるかしら？」

「世界が一つ……？」

「そう。世界が、あなたが暮らしている世界だけだと、どうして言い切れる？ そんなこと証明できる人はいないはずよ。世界が二つ以上存在するということも証明できないけれど、そう考えた

人たちが昔いたの。その人たちは、複数存在する世界を移動する手段を確立させようと何年も研究を続けてきたわ。あるかも分からない世界のために——ね」

ミュキが話す内容のことは、とてもいきなり信じる事が出来るものではなかった。並行世界という概念が存在することは悠生も知っている。しかし、それは作り物の世界において、だ。現実が存在すると思ったことは一度もない。

だが、先ほどから部屋の隅にいる拓矢だろう少年と、葵だろう少女の様子が、悠生を友達だと認識しているようには見えないことに、悠生は不安を抱いていた。

「世界が二つ以上存在するのか、それを確証することもせずに、その人たちは時間軸を移動する手段を確立してしまったわ」

「それはどうやって——？」

当然のように疑問に思った悠生は、ミュキの話を中断させるように疑問を口にする。

「……、これがその答え——よ」

少し躊躇する様子を見せたミュキだが、観念したように肩に掛けていたバッグから手鏡ほどの大きさの丸い機械を取り出した。

「お、おい……っ!？」

そのミュキの行動を見て、部屋のドアを見張るように控えていた少年が止めようと口を開くが、

「構わないわ。全部を理解してもらうためよ」

ミュキは自分たちの秘密を打ち明けることに躊躇^{ためら}わない。

「それは？」

「これは『^{タイム・ドア}時空扉』。時空を飛ぶための機械よ」

「……？」

ミュキの口から発せられた言葉はそれまでの何よりも理解し難いものだった。手の平に収まるようなサイズの機械が、本当に時空を飛ぶことができる万能の機械というのだろうか。悠生にはとてもじゃないが、その話が信じられない。

「まあ、そうでしょうね。でも、これを見たら、あなたもこの世界があなたが住んでいる世界と違うことを信じるしかないでしょう？」

そう言って、ミュキは部屋に一つだけ設けられている窓のカーテンを開ける。

そこに広がっていた景色は薄暗く、しかし分厚い雲が空を覆うどんよりとした雰囲気^{フキ}の街の全貌だ。見える街の景色も硬質^{フキ}感漂う様々な建造物が建ち並んでいるが、そのどれもが半壊状態だった。建造物の外壁が崩れ落ち、その中が容易に視認できるほどだ。まともに人が暮らしている街の様子には見えない。

「こ、これは——!？」

「信じてもらえたかしら？ まだ夜明け前だから空は暗いけれど、街の景色はもう何年もずっとこのままよ。あなたが暮らしている街

はこんな景色？」

ミユキのその一言で、悠生は窓から広がっている景色の中に見覚えのある建物があることに気付く。

「あのホールは……」

「そう、『市立スポーツ文化ホール』よ。昔はあそこでよくイベントが開催されていたのにね……」

『市立スポーツ文化ホール』、それは悠生にとっても思い出が詰まっている場所だった。そのホールが見るに堪えない状態であることに、悠生は驚く。

「そ、そんな……。先週だって、あそこで試合があつたのに——」

「それは、あなたの世界での出来事でしょ？ 私たちの世界では、あのホールはもうずっとあのままよ……」

今じゃ人が立ち入ることもないわ、という一言を飲みこんでミユキは寂しそうな表情を見せた。その表情に悠生はズキンとした胸の痛みを覚える。

（な、なんだ今の——！？）

自分の反応に戸惑っている悠生に気付かず、ミユキは話を続ける。

「どうかしら？ 私の話も信じてくれる？」

話は全て信じる、と言っていたミユキだが、悠生が信じているかどうかの確認を再度行ってくる。それは、悠生に目の前の事実を理解してもらい、全てを信じてもらうためだ。疑心があるまま話しても、肝心の伝えたいことを理解してもらえないかもしれない。こ、こんな街見せられたら、信じるしかないだろ……」

そう言う悠生は、顔を蒼白させている。それは目の前の光景が信じられないという感じではなく、なぜこうなってしまったのかという疑問によるものだ。

「良かったわ。ここまで話して信じてもらえないなんてなったら、大問題になるところだったからね」

「大問題？」

「ええ。でも、そのことについてはこれからの話を理解してからね——」

ミユキは、そこで一拍置く。

今すぐにも壊れそうな木製の椅子から立ち上がった彼女は、先ほど取り出した手鏡ほどの大きさの機械——『タイム・ドア時空扉』を部屋の壁にセツトする。

「？」

ミユキの行動の意味が分からない悠生は、はてなマークを頭に浮かべている。

「さつき、この機械が時空を移動する手段だと話したわね。つまり、あなたはこの機械によってこちらの世界に運ばれてきたことになるわ」

悠生への説明を再開した少女は、壁にセツトした機械の中央に設けられているボタンを押す。すると機械は眩しい光を放ちながら、その丸い淵を円状に広がらせていく。

「な、なんだ……っ!?」

起動した『タイム・ドア時空扉』は直径二メートルほどの大きな円を作り、その内部は薄暗い霧が渦巻いている。先ほどまで放っていた強烈な光も、起動が終わると治まり、元の鈍い銀色の光沢だけが残っていた。『これが『タイム・ドア時空扉』。この中に入れば、並行で存在している世界へ飛ぶことができるわ』

「こ、これが……」

部屋の天井にまで届きそうなほどに広がった『タイム・ドア時空扉』を見て、悠生の開いた口が塞がらない。その視線は真っ直ぐ『タイム・ドア時空扉』の円の中に向けられている。

（まるで漫画かアニメの世界のような——）

単純な感想しか思い浮かばない悠生は、その円の内側をじっと見つめて、そこで気が付く。

「……っ！　これが時空を飛べる機械なら、俺がくぐれば元の世界へ戻れるんじゃないのか!？」

それなら帰れる、と強い期待感を込めて悠生はミュキのほうへ振り向く。しかし、

「……残念ながら、それはできないわ……」

「……！？ な、なんで――？」

当然のような悠生の疑問に、ミュキは答えづらそうに口を閉ざす。その顔は先ほどよりも暗い。

「なんでだよ！ 目の前に時空を超えられる機械があるんだろ！？俺だつてこの世界のことを信じたんだ。世界が二つ以上あることは分かった。なら、この機械使えば世界を超えられることも実証済みじゃないか――！」

「そ、それはそうなんだけど……」

ミュキの返事は歯切れが悪い。そこに、
「全部をちゃんと話せよ。ここまできたら話さないほうが、後味が悪い。追手はまだ来なさそうだ」

じつと立っている少年が口を挟んだ。その顔はカーテンが開けられた窓に向けられている。窓の外の街を見ているようだ。

「タクヤ……」

その少年に部屋のドアの前に控えている少女が「口を挟んじやいけない」と忠告する。しかし、その前の単語に悠生は敏感に反応する。

「拓矢……？ やっぱり拓矢なんじゃないか――！」

「あ……」

悠生の言葉を聞いて忠告をした少女がしまった、というような表情を見せた。

「バカ。せつかく黙ってたのに――」

「ご、ごめん」

「こうなったら仕方ない。おい、お前、一つ言っておくぞ。俺はお前が知ってる拓矢とは違う。こちらの世界とあちらの世界をこつちやにするんじゃないよ」

「え……？」

少年——タクヤの言ったことに、悠生は驚いた。

「困惑しても無理ないでしょうね。私が一番に説明すればよかっただけなんだけど……、そこにいるタクヤはあなたの世界にいる拓矢とは別人なのよ。全く同じ顔をしてるけどね」

驚いている悠生に、ミュキが補足を加えた。そのミュキの言葉に、悠生はさらに混乱する。

「ど、どうい——？」

「世界が二つ存在しているのよ。それぞれの世界に同一人物が存在していても不思議じゃないでしょう？　というよりも、あなたの世界にいる人はこちらの世界にもいるって言ったほうが正しいかしら」
「同じ人物がそれぞれの世界に存在する……？」

「そうよ。何を疑っているの？　現に目の前にいるタクヤは、あなたの世界の拓矢とはDNAレベルで同じだけれども、辿ってきた記憶は全く違うわ。あなたも違和感を感じなかった？」

そう言われれば悠生は拓矢と葵と同じ顔をしている二人に対して、知っている二人と違うというような妙な感覚を抱いていた。

「たしかに、そうなんだな？」

ミュキが言っていることを確認するように、悠生はタクヤへ問いかける。

「ああ、そうだ。俺はユウキは知ってるが、お前は知らない」

「ユウキ……？」

タクヤの口から出た言葉に、悠生は眉をひそめる。

「はあ……。俺がこちらとそちらの世界にいるように、お前と瓜二つの奴がこちらの世界にいたとして不思議はないだろう？」

「……っ——！」

鈍感な悠生にため息を吐きながらもタクヤは教えた。その可能性を考えなかったわけではないが、改めて言われると悠生は複雑な気持ちになる。急に自分には双子の兄弟がいるのだと言われたような気分だ。

「そついうことよ。そして、あなたがこちらの世界に来た最大の理

由は、こちらの世界にいたユウキが、この『時空扉』タイム・ドアを使ってあなたの世界へ時空を飛んだから」

「……!？」

さらに打ち明けられる事実、悠生の反応が追い付かない。しかしミユキは話を止めない。最初に言った「そのまま信じて」の言葉の通りに。

「あなたは、ユウキがこちらからあなたの世界へ飛んだ代替としてやってきたの」

「な、なんで……?」

「この『時空扉』タイム・ドアは未完成で、誰もが使えろというわけではない。唯一使える人物が、こちらの世界のユウキだけ。彼が持っている能力とこの『時空扉』タイム・ドアを合わせて、ようやく世界を超えることができるの」

「能力?」

ミユキの口から不可解なキーワードが出たことに、悠生は気付いた。その言葉を反芻はんすうすると、ミユキは何かに気付いたように言い出す。

「そういえば、そちらの世界には『覚醒者』はいないのね」

(『覚醒者』……?)

「こちらの世界では、『覚醒者』と呼ばれる人たちがいるわ。その人たちはみな、それぞれに人知を超えた能力を備えているの。私も『覚醒者』なのだけれど、私は風を操ることができるわ」

こんな風にね、と言ったミユキは右手の人差指を立てて、無造作に部屋の中に風を生み出す。その風は緩やかながらも、悠生の目にかかるほどの前髪を持ち上げる。

「な……っ!？」

不意に風が起こつたことに悠生は驚いた。

部屋は悠生が目覚めた時から、ドアも窓も閉め切っていて風が起こる状態ではない。もちろんエアコンなどの風を送る機械などこの部屋にはなかった。

「わかった？ 私は自由自在に風を操ることができる。そして、タクヤは——」

「俺はパソコン等の電子機器あるいはネットワークにアクセスすることが出来る能力を持っている」

ミユキの言葉を引き継ぐようにタクヤが言った。大した能力でもない、といった感じの口調だが、悠生には能力差の度合いが分からない。

「私は、他人の視界を共有することが出来る能力を持ってるわ」

そして、先ほどからずっと部屋のドアの前に立っている少女——アオイが口を開いた。

「共有……？」

「実演するなら、今あなたの視界にはミユキの胸の谷間が入り込んでいて、あなたはちらちらと盗み見ているわね」

「な……っ！？」

「ぶ——っ！」

アオイの言葉に、ミユキと悠生がそれぞれ違った反応を見せる。

「な、なんで分かって——」

「どこ見てんのよ！」

悠生の視線に恐怖を感じたミユキが着ているタンクトップの胸元をカーディガンで隠す用にして、悠生をどつく。

「痛……っ！ ご、誤解だつて……！」

「何が誤解よ。アオイの能力は絶対なのよ！」

声を荒げるミユキは頬を赤くしながら、さらに悠生を掴みかかる。うとするが、悠生が危険だと判断したタクヤがミユキを止める。

「おい、それくらいにしとけて」

「ちょ——っ！ 私が真剣な話してるのに、エロい目してたのよ！？」

「殴るなら後にしろよ。お前が全部話すっていうから、こっちは付き合ってたんだぞ？」

「ぐ……。わ、わかったわよ！」

しづしづとタクヤの言葉に従うミュキだが、その目は先ほどよりも鋭くなっている。

(うわあああ、しまったな……)

ミュキに睨まれた悠生は、萎縮したようにベッドの上で縮こまっている。

「ま、まあ、これで私たちの能力は分かったでしょう」

先ほどの調子を取り戻そうと軽く咳払いをしたミュキは再び説明を始める。しかし、赤くなった頬はそのままだ。

「あ、ああ……」

頷く悠生も気まずそうで、声が小さい。

「そ、それで、こつちの世界の俺もその『覚醒者』なんだな？」

「ええ、そうよ。そして、この『時空間扉』タイム・ドアももとはユウキの能力を含めた機械と言うべきかもね。どういうカラクリで時空を飛べるのかは私たちは分からないけど、研究者たちは自信を持っていたんだよ」

「あんたらがそれを作ったんじゃないのか？」

「何を言ってるの？ さっきも言ったけど私たちはただの『覚醒者』よ。これを作ったのは、ユウキの両親が所属している研究グループよ」

「両親……？」

「あなたのじゃなくてね——」

「それは分かっているよ！ でもカラクリが分からないってのは？」

それを一度使っているながら、仕組みも分からないことに悠生は疑問を抱く。仕組みも分からない機械をよく使う気になったものだ、と。

「私たちは時空を飛べるわけじゃないからね。知らないでもいいかってスタンスなんだけど、ユウキの『空間移動』——『座標移動』とも言えるかしら——の能力とセットで使うことで初めて世界を超えられるらしいのよ」

「『空間移動』……」

どうやらユウキの能力はそういうらしい。言葉の意味から、悠生は瞬間移動するような能力なのだろう、と判断する。

「それで、ユウキがなぜ、この『タイム・ドア時空扉』を使ったのかというところ――」

そこでミユキの言葉は止まる。

その瞬間に、窓の外の街の建物から大きな爆発音が響いてきたのだ。

「……っ!？」

「な、なんだ――!？」

不意に起こった爆発は周囲に衝撃波をまき散らす。それは悠生たちがいる部屋にも届き、窓がガタガタと揺れ、部屋全体が鈍く振動する。

「追手が来たんだ!!」

いち早く反応したアオイがいきなり大声を上げる。

「追手!？」

「ち……っ! もうここがばれたか――!!」

悠生は不穏な言葉に驚き、タクヤは追手が来たということに驚愕する。

「相手はどこだ?」

慌てたように窓を開けたタクヤは、身を乗り出して周囲に目を配らす。

「数ブロック先の複合ビルよ。しらみつぶしに探してるようだけど、こちらに確実に近づいてるわ」

慌てているタクヤを落ち着かせようとアオイはそう報告する。

「数ブロック……。あと数分でこちらに来るでしょうね。場所を移すわよ!!」

アオイの報告を受けて、ミユキは部屋から出ると言う。その表情はタクヤ同様に慌てているように見える。

「移動するってどこに――?」

部屋から出ようと起動させていた『タイム・ドア時空扉』を仕舞おうとしてい

るミユキに悠生は尋ねた。
「私たちの『家』に――よ！」

第一章 世界が交わった時 ？

陽が昇る前の空は次第に明るくなっていく様を如実に表していて、生物が起きる前の静けさを一段と感じさせてくる。

しかし、その静けさは今はない。

半壊した硬質感の漂う建造物の一つに、黒から灰色に変わろうとしている空を一部燃えたぎるほどの赤に染めているビルがある。そのビルは勢いを止めない炎に飲みこまれている。黒い煙が空高くまで上がり、周囲に焦げた匂いを捲き散らかしているビルの中で、一人の少年が立っていた。

「ここも違うみたいだな」

ぽつりと呟く少年の目は、目の前に広がっているビルを燃やしつくそうとしている炎に注がれている。

その炎を見て、少年は不敵な笑みを浮かべる。

少年の背丈はそれほど大きくはない。少年の歳の平均身長よりも低いだろうか。全身黒い服装に身を纏まとった少年は鋭い目つきで、じつと燃える建物を睨にらんでいる。

「おい、トモヤ。それくらいにしとけ、次行くぞ！」

その少年——トモヤに、男が後ろから声をかけた。その男はさきほどまでユウキを捕まえようとおいかけていたスピーカーの声の男だ。

「なんだよ、ここはもう終わりか？ 俺は足りねえぞ？」

「それは次の場所でやればいいだろ？ こちらはすぐにでも追いかけたいのだがね……」

「ちえ——っ。しゃあねえな」

スピーカーの声の男に言われて、トモヤは燃え盛る炎に背を向ける。

「そのユウキつてやつは、少しは骨がある奴なんだろうな？」

「ああ、我々の手から何度も逃れている奴だからな」

「それ、単にあんたらの力が足りないだけなんじゃないか？ 大体さっきの追走戦から俺を出しておけばよかったんだよ」

スピーカーの声の男の言葉を胡散臭そうに思うトモヤは、気だるそうに言う。その表情はとてもつまらなそうだ。

「そう言うな。向こうも『覚醒者』だという確証がなかったからな。たしかに我々の力不足はあるだろうが、お前を出し惜しみしたわけじゃないさ。相手が『覚醒者』だと分かれば、こちらも同じ土俵で臨むだけの話だ。」

「ルールが決まってるリング上での殴り合いじゃないんだぜ？ 初めから全力で狩ればよかったんだよ、ライオンみたいにな」

スピーカーの声の男の話にトモヤは食ってかかる。相手のレベルに合わせている、とでも言うような言葉遣いにいらついているようにも見える。

「たしかにそうだな。それは我々の意識不足が招いた結果だ。相手はお前と同じ『覚醒者』、いくら束になっても、我々一般人には敵わないということか。悔しいことだな」

「初めっから負け犬根性満載じゃねえか。そんなんじゃ勝てる勝負も勝てやしねえよ。こっちが有利だっていう要素をいくつ作れたかが重要なポイントだろうが。それが力の差だろうが、精神的な気持ちだろうが、何ら変わりやしねえよ」

軽く言つてのけるトモヤは男の言葉をさして気にしている風ではない。それよりも『覚醒者』でユウキと相對することを待ち望んでいるようだ。

「はっは——。簡単に言ってくれるな。そう言ってくれるお前がいてくれれば、こちらも百人力だ」

「はっ！ 俺が百人力？ そんな程度だと思ふなよ？」

ニヤリと笑うトモヤの顔は、強敵を求める貪欲な狩人のものだった。

その目を見て、男はドキリとする。

（威圧感からして、我々と違うな……。これが『覚醒者』という人種か――）

トモヤの表情を見た男は足をすくませてしまう。それに気付かないトモヤはさっさと歩いていく。その背中が、異様な威圧感放っていた。

空へと上る黒煙は、その勢いを止めず、ビルを燃やす炎は依然として強烈な光と熱を新しい一日が始まろうとしている街に放っている。

第一章 世界が交わった時 ？

太陽が昇る前の街を悠生^{ゆうせい}は必死になつて走^{はし}っていた。その前をミユキとタクヤ、アオイの三人が走っている。

「はあはあ……」

乱れる呼吸を無理矢理整えながら、悠生はそれでも足を止めない。いや、止めるわけにはいかなかった。

「追手は……っ？」

「まだ距離はある。けど、こっちが移動したのに気付いたのかも——っ！ 車使いだした——！」

「ち……っ！ 車——」

（装甲車かしら……？）

アオイの報告を聞いて、ミユキは一瞬考える。悠生を捕まえるまでに追われていた男たちが追手だしたら、その考えは間違いではないだろう。

「おい、車ってどうすんだよ！？」

「どうするもなにも——。向こうがそれだけ本気ってことよ！」

「けどよ、このまま真っ直ぐ逃げても追いつかれるだけだぞ！？」

走りながら会話をしているミユキたちの足はとてつもなく速い。

油断をするとみるみる悠生との差がひらいてしまう。だから、悠生は疲れても走る足を止めるわけにはいかない。

「はあはあ……」

（なんだよ、こいつら。めっちゃ足速いじゃねえか——っ）

必死に追いかけている悠生だが、その差は詰まらない。真っ直ぐな平坦の道で、女の子にも走ること負けしてしまう悠生は少しいらつく。

（だいたい追手ってなんなんだよ——。なんで俺はこっちの世界に飛ばされたんだ！？）

「はあはあ……はあはあ……、わけわかんね——っ」

状況が理解できない悠生はわけも分からずに、ミュキたちの後を追うように走っているのだ。

（もう少して聞けるとこだったのに……）

ビルが爆発する前に聞こえていたミュキの声が頭をよぎる。彼女は間違いなくユウキが『タイム・ドア時空扉』を使った理由を言おうとしていた。その言葉は爆発が起こったことで途切れたが、何か深刻なことが起こっていることは悠生にも想像がつく。しかし、それに自分が巻き込まれていることが理解できないのだ。

「なんだってんだよ……っ！」

煮え切らない怒りがふつふつと湧き上がってくる。それは放出する方向も定まらない怒りで、悠生自身もどうしようもなかった。

なぜこの世界に飛ばされたのか、なぜ追いかけられているのか、誰が追いかけられているのか、なぜミュキたちと一緒に逃げなければならぬのか。悠生には分からないことがいくつもある。

しかし、頭にはミュキの「そのまま信じて」の言葉が何度も反芻はんすうされる。

「くっそおおおおおっ！！！ 速すぎだろ、おまえらあ！」

その全てのうっぷんを晴らすように、悠生は大声を上げた。

「……？」

「？」

背中にかけられた大声で、悠生の前を走っていたミュキたちが立ち止まる。

「はあはあ、速すぎるってお前ら……」

立ち止まったミュキたちに追いついた悠生は膝に手を当てて、肩で息をしている。その顔にはびっしりと汗が流れていた。

「なんだよ、お前が遅いんだろ」

「ちよ、タクヤ——っ！」

口調が悪いタクヤをたしなめるように言うミュキだが、タクヤは口を閉じない。

「だって、そうだろ？ こっちは必死こいて逃げてんのに」

「そうだけど、言い方ってものが……」

「なんだよ、トロトロしてるのは事実だろうが！ 何のために俺らがこうして——」

「だから、やめなつて！」

さらにいらだつように口調を荒げるタクヤをミュキは必死に止める。

「こうしてる今もあいつらは近付いてきてるのよ！？ ここで言い争いしても仕方ないでしょ？」

（あいつら……？）

まだ中腰で呼吸を整えようとしている悠生は、ミュキの言葉に敏感になる。

これも何度目だろうか。悠生は自覚がないが、この世界のことは分からないがミュキの話には重要なことが隠されていると思っている。

「だとしたら、もっと先を急ぐべきだろ？」

「そうだけど、私たちだけが先を急いでも仕方ないでしょ？」

「だけど——」

引き下がろうとしないタクヤだが、そこに悠生が割って入る。

「な、なあ！ 一つ教えてくれつ。追手が来てるって言つてたけど、誰が追われてるんだ？ それに追手ってなんだよ。それを最初に説明してくれてもいいだろ？」

意味も分からずにただ走るのはごめんだ、と状況の説明を悠生は求める。

「……」

「おまえ——」

パラレルワールド

「頼む。俺には並行世界ってだけでも頭がパンクしそうになつてくらいなのに、追手が来てるだとか頭がついてけねえよ」

身ぶり手ぶりを大きくして、悠生は必死に訴える。

半壊の建造物が均等にブロックに分かれている街並みの通りのど

真ん中で、悠生たちは立ち止っている。そこからも、今も燃え盛っているビルが見える。悠生はそのビルのほうへ視線を向けて、

「あれと俺たちが逃げていることは関係あるんだよな!？」

「……」

「なあ？ 教えてくれよ！ なんで逃げてんだ!? 誰が、なんで追われてんだ!？」

一向に自分の疑問が解消されない悠生もタクヤ同様に声を荒げる。その言葉にタクヤはさらにいらいらしてしまう。そして溜まった怒りを放出するように、

「ほっんとおまえ頭悪いな！ 追われてんのはお前に決まってるうが!！」

「え……っ?」

タクヤの言葉に、悠生は驚いた。その表情は時間が止まったように顔が凍りつく。その表情を見て、タクヤも驚く。

「ほんとに気付いてなかったんだな——たく……っ。こつちの世界のユウキが『時空扉』タイム・ドアを使つて世界を超えたのも、追われてるからに決まってるんだろ！ お前が代替としてこつちの世界に来たのも、

そのことを奴らに知られないためにだよ！ 俺らがこうしてお前をかくま匿つて、こつちの世界のことを教えて助けようとしてんのも、まだ奴らがユウキが時空を超えたことも知らないからだ！ つまり、奴らはお前がこつちの世界のユウキだと思つて今も追いかけてきたんだよ!——!」

「な!？」

（俺が狙われてるって——）

立て続けに言われる事実、悠生はさらに驚愕する。きょうがく顔面を蒼白にさせている悠生は、その事実言葉に紡げない。

自身のいらつきを吐きだしたタクヤはすっきりとしたようで、ミユキのほうに顔を向ける。

「はあ——」

（言っちゃった——か……）

その視線の意図を汲み取るように、ミュキはタクヤの言葉を引きとるように話を続ける。

「話してなくてごめん……。というよりも、その前に追手が来ちゃったんだけど。あなたがこちらの世界に来た理由は、半分はタクヤの言う通りよ。事後報告みたいになっちゃってごめんなさいね」

申し訳なさそうにミュキは言う。その声色に、悠生は憤りをぶつけただけのことに気付く。それは仕方のないことだったが、それが助けてくれようとしている人たちへのひどい所業に思えたのだ。

「い、いや——」

それまでの勢いを失ったような、小さな声で悠生は返事をする。「教えてくれてありがとう……」

そう小さく言うことしか出来なかった。

（俺は代替品……）

その一言が悠生の胸を抉る。

それは、この世界での悠生の存在意義だ。悠生の知らないところで行われた時空移動は、悠生を大きな時空の流れに巻き込んでいる。そこに悠生の意思は汲み取られていない。あくまでも受け身ではない悠生はその流れに身を任せるだけであり、流れに逆らうことができない。それを悠生は自ら証明してしまっている。

「……………」

その悠生に対して、ミュキはかける言葉がみつからない。

無理矢理巻き込む形で悠生をこちらの世界に連れてきてしまったことには、無論申し訳ない気持ちがある。ユウキの時空移動は最終手段だったとしても、その代価は同じDNAを持つ人物をユウキの代わりに危険な目に合わせることだ。その人物——悠生の意思も気持ちも考えずに。

「あなたにはどれほどの償いをしても許されないことは私も理解している。無理矢理こちらの世界に連れてこられた怒りをあなたが抱いても不思議ではないし、私たちが信用できないことも分かるわ」
それでも、とミュキは言葉を続ける。その声に万感の思いを込め

て。

「あなたは私たちが守る。あなた——いえ、あなたとユウキが生きていることが私たちの世界の未来になるかもしれない」

真摯^{しんじ}な目は真っ直ぐと悠生の目を捉える。

「世界の未来……？」

そして、その言葉の重さを悠生は何となく理解する。説得や同意を得るために、そのような言葉を使う人はいないだろう。そこには何か、もっと大きな理由があるはずだ。その理由が、先ほど感じた——こちらの世界で起こっている何か深刻なものと繋がっているような気がした。

「ええ。私も全てを知ってるわけじゃないんだけど……。それにっついては逃げきつてから話すわ。タクヤも言っただように、今は逃げる事が最優先よ。あなたが捕まることだけは避けないと——」

そう言つて、ミユキは先を急ごうとまた前を向く。ゴールがあるかも分からないマラソンに向かうようで悠生は少し嫌な顔をするが、追われているのが自分と分かった今はいやいやと愚痴も言うわけにはいかない。

「さあ、行くわよ——」

悠生の決心したかのような表情を見て、ミユキは掛け声をかける。そしてミユキを先頭にまた走りだそうとしたところに、

「おっと、どこに行くんだ——？」

血の氣に飢えたような、貪欲な声が聞こえてきた。

「……っ!？」

「なんだ——？」

不意に聞こえてきた声に、ミユキとタクヤがそれぞれ驚きながらもすぐに構える。声が聞こえてきたのは、これから行こうとしていた方向からだった。

聞こえてきた声と同時に、目の前の壊れた信号機が大きな音と強烈な炎にまかれながら倒れていく。そして、あっという間に周囲は燃え盛る炎に囲まれてしまった。

「やっと見つけたぜ、ユウキよオ。ここでお前を殺しても文句はねえんだろうなア!？」

その炎の壁の中から、獲物を見つけた狩人のように、また血肉に飢えたライオンのように鋭い眼光を飛ばして一人の少年が姿を見せる。

第一章 世界が交わった時 ？

空気を焼きつくすような炎が、今にも枯れ果てようとしている街路樹の命をさらに締めようと盛んに燃えている。その炎は全壊あるいは半壊した建物ばかりの街の大通りを走っていた悠生^{ゆうせい}たちを、これ以上どこにもいけないように囲っている。

その炎に囲まれた悠生たちは苦虫を潰すように周囲を囲っている炎を睨^{にら}んでいる。その炎の壁から現れた一人の少年——トモヤがさらに口を開く。

「……ったく。あっちこっち逃げてくれてよオ。こっちの労力をこれ以上割かせないでくれよな」

貪欲な目をしているトモヤの表情は、血肉を求めている肉食獣でしかない。そのトモヤの身体は、地上二メートルも燃え上がっている炎の中を歩いたにも関わらず火傷を負ったわけでもなく着ている服も燃えていない。

（『覚醒者』か——）

その服と身体を見て、悠生を除いたミユキたちはトモヤが『覚醒者』だと気付いた。

「おい、ミユキ……」

「うん、分かっている。向こうが雇った『覚醒者』でしょうね」

タクヤの耳打ちに、ミユキは頷いて答えた。『覚醒者』を出してきたということは、さらに本気になったということだろう。

「さて、俺の狙いは分かっているよなア？ そっちがユウキを差し出すなら、他の奴は見逃してやってもいいぜ？」

交渉を行ってくるトモヤだが、それに乗るミユキたちではない。無論トモヤもそれを理解しているだろう。それでも、それがトモヤのやり方なのだ。その形式あるいはルーティンを崩したくないのだらう。

「おい、何勝手なことを言っている？」

そこに、スピーカーを介した声が聞こえてきた。その声は、やはり先ほどからユウキを追いかけている男の声だ。

聞こえてきた声に驚いたミユキたちはどこから話しているのかと周囲を見渡すが、どこにもスピーカーの声の男の姿は見当たらない。「すでに、我々の存在と計画の一端を知ってしまったのだ。ユウキ以外は殺せ」

「……っ!？」

スピーカーを介して聞こえてきた言葉の内容に、悠生たちは目を開いて驚いた。その声はあまりにも平淡で感情がないものだった。

(本気で殺す気が……)

その本気を受け取ったミユキは、この状況が危機的だと改めて認識する。『覚醒者』の数では圧倒しているが、ともに正面からぶつかったとしても必ず勝てるという算段があるわけでもない。

「なんだよ…… ったく——。俺なりのやり方つてのも認めてくれないじゃないかねえのか、シンジの奴はよオ」

スピーカーから聞こえてきた声を聞いてトモヤはシラけたとでも言うように、声のトーンを落とした。

(シンジ?)

トモヤが言った名前にミユキたちは眉をひそめる。その名前が指しているものをうつすらと考えるが、それを確認し合う時間すらもトモヤは与えない。

「じゃあねえ。さつさと仕事を終わらせてもらっぜ——っ!」

「まず——っ!」

トモヤは一度の跳躍で数メートルの距離を一気に縮めてくる。その動きを見て、ミユキはその狙いを思い出すが、それよりもトモヤの突撃の方が速かった。トモヤあるいはスピーカーの声の男たちの狙いはあくまでもユウキである。ユウキがすでに時空移動したことを知らないトモヤの突撃も真っ先に悠生を狙ったものだった。

「がっは——っ!？」

そのタツクルと呼ぶにはあまりに衝撃の多い突撃を受けた悠生は、
為す術もなく吹っ飛んでしまう。

「一発で終わると思うなよ!!」

一撃目を悠生に与えたトモヤはさらに追撃をかけようと右手の中に
テニスボール大の火球を作りだす。手のひらに作りだされた火球
を見たミュキが、悠生を守るために二人の間に割って入る。

「……っ！ まずお前から殺ってやろうかア!!」

割って入ったミュキにもトモヤは動揺を見せない。それどころか、
さらに獰猛な表情を見せたほどだ。

作りだした火球を悠生に対してではなく、ミュキに対して放つ。
その火球は鳥が飛ぶような速さでミュキへと一直線に飛んでくる。

自身へと飛んでくる火球をミュキは風で押し返そうと、手のひら
から風を作りだす。しかし、火球はその風に煽られて、さらに肥大
化していく。

「……っ!？」

自身が放った風が火球を押し返すどころか、火球への助力になっ
たことにミュキは驚いて身動きが固まる。

「ミュキ——っ!」

飛んできている火球をかわすための行動が出来ないでいるミュキ
を、タクヤは横っ跳びで地面へと押し倒すことで回避させた。地面
へと倒れたその二人の上を肥大化した火球が飛んでいく。

「あ、ありがと、タクヤ」

「意識を集中しろよな。ぼうつとしてるんじゃないよ!」

火球を自力でかわすことが出来なかったミュキにタクヤは叱咤^{しった}し
た。それは戦闘の意識が低いミュキの意識を取り戻させる。

「ご、ごめん……」

「謝ってる場合じゃないだろ!」

さらにタクヤはミュキに対して激しく言った。その言葉を受けた
ミュキは眼に力を取り戻して、もう一度トモヤを睨む。

「『風』系の『覚醒者』か——」

そのやり取りをじっと見つめていたトモヤは言葉遣いから受ける印象とは打って変わって、冷静にミュキの力を分析していた。そしてミュキの力を『風』系のものと判断した。

（『風』の力はやっぱりいいじゃない。ユウキの前に立ちはだかるなら、すぐ殺して——）

そのように考えたトモヤだが、その考えに反してミュキは全く別の行動を取る。

悠生を守るためにトモヤの前に立ちはだかるのは同じだったが、その口から出た言葉はトモヤにとって意外なものだった。

「ここは任せて——！」

眼に力を取り戻したミュキはそう言って、一人でトモヤの前に立ったのだ。

「でも……」

ミュキの力強い言葉でも、悠生は逡巡^{しゆんじゆん}してしまふ。『炎』系の『覚醒者』であるトモヤが強いことは悠生にも分かる。そのトモヤをミュキ一人で戦わせることに罪悪感を抱いているのだろう。

「いいから！ 先に行つて——っ」

そう言つて、ミュキは身体全体で風を生み出し、周囲の炎の熱を利用して上昇気流を作りあげる。

「……！？」

（ユウキをここから逃がすつもりか——っ！）

ミュキの行動の真意に気付いたトモヤは、させまい、とミュキに突撃を行うが、それもトモヤが作った炎の壁と同様にミュキが作った竜巻の壁に阻まれる。

「くそ——っ——！」

竜巻の壁に阻まれたトモヤは、その先にいるミュキを強く睨みつける。しかしミュキは涼しい顔をしているだけだ。

「いいんだな？」

そのミュキの言葉を聞いたタクヤは確認の言葉を告げた。

「うん。今大事なことは何か分かつてるでしょ？」

「わかった」

強いミュキの意思を確認してタクヤは任せろ、と頷いた。そして、ミュキが作りだした上昇気流に乗る。

「お前も来るんだよ！」

そう言つて、上昇気流に乗ったタクヤは悠生も手を引いて、同じように上昇気流に無理矢理乗せる。その後をアオイも続いていく。

「こっちは任せて。悠生は必ず守るから」

「うん。信じてるよ、アオイ——っ！」

ミュキとアオイは固い約束を交わした。それぞれが為すべきことをしっかりと実行するために。それが、これからの世界のためになると信じて疑わずに。

「ちょ……、ちょっと、あんたら——」

上昇気流に乗った後も悠生は何かを言おうと口を開くが、それすらもタクヤは無視して、上昇気流を利用して高く高く飛びあがっていく。その勢いは止まることを知らなくて、気付いたら半壊状態の建物の屋上まで飛びあがっていた。

「建物の屋上へ飛び移れ！！」

その高さまで上昇気流で飛びあがったことを確認したタクヤが、悠生とアオイの二人に言った。

「こ、この距離を……？」

しかし、アオイは躊躇^{ためら}いの声を上げた。

見ると、上昇を続ける風に乗っかっている状態の悠生たちから、建物の屋上までは間に二メートル近い距離があった。助走もなしに、その距離をジャンプすることはアオイにはあまりにも難しい。

「くそ……」

（どうする——）

間にまたがる二メートルほどの距離を見て、タクヤは下唇を噛みながら、何か良い方法はないかと考える。

男であるタクヤはこの距離を飛ぶことに、それほど苦は感じていない。それは、下の状況を見つめている悠生も同じだろう。ミュキ

に、悠生のことを任せろ、と言ったタクヤはここで立ち止まっているわけにはいかない。

「悠生、お前は飛べるよな？」

「え？ あ、ああ……」

いきなりタクヤに聞かれた悠生は、意味が分からないなりに頷いた。

「それなら先に飛べ！」

頷いた悠生に、タクヤはそう言った。

「？ どういう——？」

「先に飛んでそこで待ってる。俺がアオイを投げ飛ばすから、それをお前が受け止めるんだっ！」

そう言ったタクヤの言葉に、

「……っ！？」

「た、タクヤ……！？」

悠生とアオイがそれぞれ驚いた。

しかし、タクヤはいたって平然としている。アオイが無事に建物の屋上に飛び移るにはそれしか方法がないと踏んだのだろう。

「このままここでじっとしてることもできない。上昇気流は今も空へと上っていつてるし、ここは建物から格好の的になる。相手はあの『覚醒者』だけじゃないんだ！ ここで迷ってるわけにはいかないだろ——っ」

その言葉にアオイも「そうだね」と同調する。二人のその決意を聞いた悠生は、まだ決断できずにいた。

「で、でも……」

「今が危険な状況だっていい加減分かれよ！！ ここでぐちぐちしてる時間はほんとにないんだよ」

そのような悠生に対して、タクヤがきつく言った。その目も次第に鋭くなってきている。

「わ、わかったよ……」

そのタクヤの視線を受けて、悠生はしぶしぶといった感じで返事

をした。そして、その場で勢いをつけるように大きく両手を振って、建物の屋上へと飛び移る。

「痛っ……！！？」

なんとか建物の屋上から建物の屋上へと飛び移った悠生は、着地の際についた両足にジーンとした痛みが走り、痛みに顔を歪めた。

その痛みに耐えた悠生は、まだ上昇気流に乗っているタクヤとアオイへ振り返る。

「い、いいぞ」

「わかった。絶対にアオイを受け止めるよ！」

悠生が建物の屋上へ飛び移ったのを見て、タクヤはアオイの腰を持って身体を持ち上げる。不意に身体を持ち上げられたアオイは恥ずかしそうに頬を赤く染めて、顔を背けている。

「上手くいくと信じてろ……！」

「う、うん」

アオイの返事を聞いたタクヤは、アオイの身体を持ち上げている腕にさらに力を振り絞る。そして、ハンマー投げよろしく大きく振りかぶってアオイの身体を空中へと投げ飛ばす。

「き、きゃあああああ——っ！！！」

タクヤに投げられたアオイは、その反動から大きな悲鳴を上げた。その身体は、高さ一メートル以上はあるだろうという空中に投げだされている。そしてふわりとした絶叫マシンで感じる特有の浮遊感がアオイの全身を包み込む。

（こ、こい——っ！）

こちらへ向けて飛んできているアオイの身体を受け止めるために、悠生は両手を大きく開いて構えている。しかし、その足は柵もない建物の屋上ぎりぎりの所にあるため、がくがくと震えていた。

「絶対に受け止めるよ！」

その悠生の反対側で、アオイを空中へと投げ飛ばしたタクヤは大声を上げて悠生に言っている。

二メートルほどの距離をアオイは間違いなく飛んでいる。あとは

悠生が上手くアオイの身体を受け止めるだけなのだ。しかし一步でも踏み外せば、悠生もアオイも地上へ向けて真っ逆さまである。その恐怖に打ち勝て、とタクヤは暗に言っているのだ。

その声を聞いて、悠生の眼にも真剣さが宿る。その目は真っ直ぐアオイの視線へ向けられていた。

そして、アオイの身体が悠生のもとへと飛んでくる。

「ぐふ——っ!？」

アオイの身体を受け止めた悠生は、腹部に強い衝撃を受けて息が詰まってしまう。その衝撃で力が緩みそうになるが、それも悠生は震えながら立っている足を踏ん張ることで、なんとか踏みとどまる。いくら少女の体重でも二メートルほどの距離を飛んできているので、その衝撃はやはり大きい。その衝撃を受けた悠生の足は緩みそうになる力を踏ん張っても、悠生の身体の重心をぐらつかせる。

「や、やば——」

足が前後にぐらついたことに、悠生是最悪の事態を想像して蒼白した表情になった。そこにタクヤの声が届く。

「そこで踏ん張っとけよ!」

聞こえてきたタクヤの声を悠生は意識した瞬間に、悠生の目の前に影が差す。それはタクヤの身体だった。タクヤもすぐに上昇気流から飛び移ってきたようだ。建物の屋上へ飛び移るために、上昇気流から飛んだタクヤは、建物の屋上の端でアオイを抱えたまま身体をぐらつかせている悠生を、後ろへと押し倒す。

「ぐ……!？」

「がっは——」

アオイを抱えた悠生とタクヤは衝突して、そのまま建物の屋上へ倒れた。アオイとタクヤの二人が^の押し掛かるかたちに倒れた悠生はさらに呼吸が詰まってしまうが、地上へ落ちていくことだけは免れた。^{まぬが}

「はぁはぁ……。ほら、上手くいったろ？」

立ち上がりながら、タクヤは結果オーライといった感じで調子良

さそうに言った。

「ま、まあそうだけど——」

それにはアオイも頷くが、空中に投げだされるという恐怖は簡単には拭えない。建物の屋上から地上を見下ろすとかかなりの高さだった。この高さで二メートルも飛んだのだと思うと身体がすくんだ。

アオイとは逆に、悠生たちが無事に飛び移れたこと地上から確認したミユキは、やった、というような笑顔を見せている。

（これでは無事に逃げてくれるのを祈るだけ——ね）

そして、自身は目の前にいるトモヤへと視線を戻す。

そこに、

「何をやってる、トモヤっ!!」

炎の壁で囲っておきながら、みすみす悠生たちを逃がしてしまつたトモヤに、スピーカーの声の男が激昂げっこうした。その怒りは声の質からもはっきりと分かる。

「あゝ、うっさいなア……。逃がしちゃったのは俺が悪いが、こっちは取り込み中だ。こいつを速攻で殺してから、追いかければいいだろ？ それまではそっちが勝手においかけとけ」

その怒号を聞いても、トモヤの表情は揺らがない。目標の相手を瞬時に悠生から、ミユキに変えているのだ。

その目は先ほどまでの獰猛さを再び見せつけてくる。

「……わかった。そいつは任せたぞ、ここで始末しろ!」

「はいはい、了解したぜ」

当初の計画が上手くいかなかったことにいらだちを見せているスピーカーの声の男を放っておいて、トモヤはミユキに対して牙をむく。

それは炎で生物を容易く殺す——人知を超えた力だ。

第一章 世界が交わった時 ？

またしても悠生^{ゆうせい}は廃れた半壊状態の建物ばかりの街を走っている。絶え絶えになつてゐる呼吸を整える暇もないほどに走り続けている。その視線は何度か走つてきた道を振り返っている。

「何度も後ろを確認しない。あなたが今心配することは自分の身の安全だけ——よ」

何度も振り返っている悠生に対して、その後ろを走っているアオイが注意する。アオイのその顔はどこか焦っているようで、悠生は自分の世界の葵が見せたことのない表情だと、不謹慎にも思つてしまつた。

「でも……」

「でも、もなし。今は走ることに集中して。ゴールなんてあるかも知分らないんだから——」

アオイの、その表現の仕方に悠生は戸惑^{とまや}う。

「ゴール？」

「ええ。無事にゴール出来るといいね」

走りながらもアオイはニツコリと笑顔を見せる。その時、一瞬だけアオイの真剣な表情が和らぐ。

その表情を見た悠生は照れたように振り返っていた顔を再び前へと向ける。しっかりと前を見据えて、ゴールというただ一つの終着点へ向けて走るために。

「アオイ！ 奴らは追つてきてるのか!？」

その二人の前を走っているタクヤは、一番後ろを走っているアオイへ大声で尋ねた。

「ちよつと待つて」

タクヤの質問に、アオイはそう答えた。そして、彼女は片目の瞼^{まぶた}を閉じる。それがアオイの『覚醒者』としての力の発動条件なのだ。

片目を閉じたアオイは視界を共有できる対象を半径三〇〇メートルの中から探し出す。

数秒後、その範囲内にいた鳥にアオイは視界共有を行う。そうすると、閉じたアオイの片目に鳥が見ている視界が映し出される。

「……追いかけてきてるっ！ 距離は正確にわからないけど、左後方から、数は一〇人程度。二台の装甲車に乗ってるわ——！！」

鳥の視界を共有して、発見した追手の数と方角をアオイはそのように報告した。

「ち……っ、また向こうは車だよ」

その報告を受けて、タクヤは苦いような表情で反応した。その反応は先ほどのミユキのものと同じだ。それは二人とも本気で逃げることを考えているからだ。

「向こうは車が通れる幅がある道しか通れないんだから、こっちは建物に隠れるとかは？」

走りながら逃げる道を探しているタクヤに、アオイはそう提案をした。

それは妥当な判断だ。装甲車と言え、それが整備された道であれ砂利道であれ、走れる幅がある所しか走ることはいできない。その装甲車が走ることができない幅の道や建物内に逃げることは最良の手だろう。

「それしかない——か……」

きよろきよろと十字路にさしかかるたびに左右の道を遠くまで見ているタクヤは、アオイの提案を受けいれる。

「なら、こっちだ！」

アオイの提案を受けたタクヤは二人を先導しながら、左の路地へと急に方向転換をした。そのまま走っていくタクヤを、悠生とアオイは必死に追いかける。

（なんで……俺、起きてから走ってばかり……）

前を走っているタクヤを追いかけているが、悠生は再び同じような疑問を抱いた。もう一度現状の理解を求めたい悠生だが、タクヤの

走る速度が速すぎるためついてくのが精一杯で尋ねることが出来な
いでいた。

「はあはあはあ……ったく——」

（だいたいミユキを置いてきたのだって、なんで——）

自分一人では何も決断あるいは行動できないでいる悠生は、それ
らの真意が分からない。それらの困惑が解けないまま、悠生は指示
されたまま走っている。それは、こちらの世界で目が覚めてからの
悠生の状況と何ら変わっていないかった。

それまでの大通りから左の路地へ入ったタクヤはそのまま数十メ
ートル走ったところで、一つの建物の中へ入っていく。

「この建物に一時隠れるぞ」

そして、悠生とアオイに言った。

「うん」

「わかった」

それぞれ頷いた悠生とアオイも、タクヤに次いで建物の中へ入っ
ていく。

悠生たちが入った建物はかつて企業のオフィスが設けられていた
複合オフィスのなれのはてだった。その一階には、まだオフィ
スビルとしての名残のように各階に入っている企業名が書かれたイ
ンフォメーション板が^{すた}廃れながらも残っていた。

「どこに隠れる？」

そのインフォメーション板を見ているタクヤにアオイが尋ねた。

「……どこかに鍵がかかってない部屋があるかもしれない。そこに
身をひそめよう」

インフォメーション板を見ながら言ったタクヤは壊れたエレベ
ーターではなく、その隣にある非常用の階段で上の階に上がっていく。
その後を悠生とアオイも追いかける。

複合オフィスのビルは電気が通っていないため、建物内がかなり薄
暗く、太陽が昇ろうとしている街の明かりも建物内には入ってこな
い。この複合オフィスのビルも半壊状態であり、廊下の壁はところど

ころ壁が剥がれ落ちていたり、廊下に瓦礫が落ちていた。そのため手探りでゆっくりと歩くしかなかった。

（ビルがこんな状態になるなんて……）

その建物内を歩いている悠生は、悲惨な状態になっている建物内部を見て驚いていた。悠生がいた世界ではこのような状態の建物を生で見ることはなく、地震や戦争のニュースをテレビで見るくらいしかなかったのだ。

二階が上がってきたタクヤは廊下を歩いているうちに見つけた一つのドアの前に立っていた。タクヤに追いついた悠生とアオイもドアの前に立つ。

「このドアが開いてる、というよりも壊れてる。ここに隠れている。あまり上の階に行っても、見つかった時ビルから出るのに苦労するからな」

「うん」

タクヤの言葉に二人とも賛同して、壊れたドアから部屋の中に入っていく。

その中は小企業のオフィスとして使われていたようで、機能を失った今も様々なものが残されていた。企業の書類が無数に入っているだろうファイルがまとめられているロッカーや複数並べられているオフィス机も壊れて使い物にならなくなっているだろうが、そのまま残されている。

「争いが起こったときに、身一つで逃げたんだろうな……」

その状況を見て、タクヤはぽつりと呟く。その声は悠生とアオイには届かなかった。二人ともオフィスの残骸を見て、そのまま残された椅子に腰を落としている。

「ここで一息つこう」

その二人にタクヤは、休憩だ、と言った。

「追ってきてる奴らが俺たちが隠れたことに気付かなければ、また出発だ。少しでも早くここからは出たほうがいい」

「う、うん」

タクヤが言ったことにアオイは頷いたが、悠生にはもやもやとした感情が依然として渦巻いていた。その感情は、冷静にこれからのことを話しているタクヤに自然と向けられる。そのタクヤはアオイと何らかの話をしている。

（もう我慢できねえ……）

ふつつつと煮え切らない思いが滾^{たぎ}つてきている悠生は座っていた椅子から立ち上がって、タクヤの前まで歩く。

「どうした？」

悠生の突然の行動にタクヤは不審を感じて、尋ねた。

「あんたはここから少しでも遠くに行くことしか考えてないのか！？」

「？ そうだが——？」

だからどうした、とタクヤは再度尋ねる。その言葉に悠生の引鉄が引かれる。

「なんで、ミユキだけを置いてきたんだよ——！」

ミユキだけをあの場に置いて逃げるといふ手段を取ったタクヤに悠生は激昂^{げっこう}して、タクヤの胸ぐらを掴む。

「……………」

その悠生の行動を見ても、タクヤは何も言わない。鋭い視線で睨んでいる悠生の目を真っ直ぐ見つめているだけだ。

「なんとか言ったらどうなんだよ！」

何も喋らないタクヤに悠生はさらに突っかかる。その強い口調でもタクヤは動じない。

「ちょ、あなた……」

その悠生を見てアオイがなんとか止めようと恐る恐る声をかけるが、それでも悠生の怒号は止まらない。

「葵は黙っててくれ。こいつの決断が気に食わねえんだよ」

「ちょ、ちよつと——」

一向に血の気を抑えようとしない悠生に対して、アオイはもう一度落ち着かせようと声をかようとするが、

「アオイ、いい」

と、タクヤがそれを止める。

「……？」

アオイはタクヤの真意が分からずに首をかしげた。アオイの言葉を遮ったタクヤは、悠生に負けないほどに鋭い視線で悠生を睨みつける。その視線を受けて、悠生の勢いもいくらか削げる。

「な、なんだよ……」

その声もタクヤの視線を受けて、少し震えている。それまでの怒号も急に熱を失ったようだ。

「俺たちがあの場に残って、何の役になった？」

「……え？」

ぽつりと呟いたタクヤの言葉が上手く聞き取れなくて、悠生は素っ頓狂な声をあげた。その顔からも鋭い視線が消えている。タクヤの胸ぐらを掴んでいた手も離されている。

一方で、タクヤの顔は次第に恐さを増していつている。

「だから！ 俺たちが残って何が出来た！？ 俺とアオイはたしかに『覚醒者』だが、戦闘向きの力じゃない！ けど、あいつは違ってた……っ。お前も見ただろう！？ あいつは手から炎を出してた。身体中から火を吹けるんだ！！」

その言葉は止まらない。

「そんな奴相手に、何の力も持たないお前に何が出来るんだ！？ 同じ『覚醒者』の俺たちも殴り合いじゃ歯が立たないんだ！ そんな奴相手にしてるミュキの所に残ったって、俺たちはミュキの足手まといにしかなんねえんだよ——っ！！！」

止まらないタクヤの言葉は窓ガラスがなくなり吹きさらしの部屋の中で響きわたる。反響しそうなほどの声に圧倒された悠生は言葉を発することができない。

「……………」

悠生に負けず劣らず大声を出したタクヤに、悠生は何も言えなかった。

「分かれよ！　なんでミユキが俺たちだけ先に逃がしたのか、なんで一人だけあの場に残ったのか——っ。その意味も理解してない奴が、意気がったこと言ってんじゃねえ！！」

タクヤの言葉が、強く悠生の脳を揺さぶる。ミユキの思いを悠生はその全てを理解していなかった。いや理解していないわけではない。ミユキの、必ず守る、という言葉を悠生は聞いて、悠生はミユキのことを少しは信じている。

強い相手を前にして、一人が残ったことが理解できないのだ。

「俺もアオイも、あの場にミユキを残したことを何とも思っていないと思うなよ——！！　俺だって出来るならあの場に残って一緒に戦いたかったさ。それが出来るならな！」

(……！)

止まらない怒号を上げているタクヤの声が震えていることに、悠生は気付いた。そこにタクヤの思いが込められている。

その思いはアオイも同じなのだろう。アオイもじっと悠生を見つめている。

「私たちはミユキに、あなたを守ることを約束した。狙われているのはあなたで、一番危険なのはあなただから。その約束を反故にすることはできないわ。私たちの決断も理解してほしいの」

アオイは、その思いをしっかりと言葉で伝えようとしている。その言葉を受けた悠生は俯いてしまう。

「ご、ごめん……」

そして、小さく言った。

「分かってくれれば、それでいい。俺たちは何よりもお前を守らなければいけないんだ」

俯いた悠生に、タクヤはそう言った。

その言葉にも、アオイと同様に自身の思いを言葉で伝えようとしている意思があった。それに気付いた悠生はそれまでの自分の意識の低さあるいは理解の弱さを思い知る。それはこれから、悠生がこの世界にいたためには重要なものだった。

第一章 世界が変わった時 ？

空へと上つていく暖かい風はすでに消えてなくなり、再び辺りには赤々と燃えている炎を除いて、静寂が訪れていた。

風の音も、虫や鳥の声も、人が生活している音も聞こえてこない。聞こえてくるのは二人の『覚醒者』が対峙している緊迫感からくる呼吸音だけだ。先ほどまでこの場にいた悠生たち、およびスピーカの声の男——シンジとその部下たちもない。

「仲間を逃がして、お前だけ俺とぶつかる……か。そんなに大事なんだな、ユウキってやつが」

日の出前の澄んだ独特の空を見上げて、トモヤはミユキに対してそう言った。その視線は悠生たちがいた建物の屋上にも向けられている。

「あなたに教える必要はないわね」

じつと視線を上に向けているトモヤに、ミユキはきっぱりと言った。そんな話をしてる場合じゃないぞ、と。

「そうだな。……しかし、俺には重要なことだ。大事にしてる男が目の前で燃えカスになるのをお前に見せてやりてえんだよ」

「外道な趣味ね。それを見た私の表情でも見たいのかしら？」

トモヤの言葉を聞いたミユキはブルツと身体を震わせる。トモヤの口調や態度を見ていれば、それを平然とやりかねないという予想がたつ。

「当たり前だろう？ ただ殺すことに何の意味がある——？」
しれっとトモヤは言った。

「……あなたは命を絶やすことに意味を求めているの？」
「当然だ！ 殺戮衝動でやってるわけじゃねえぜ？ まあ、昔はそうだったがな——。今はそれじゃ飽き足んねえだよ。そいつの大事

なモン奪ってやった表情見て、悲痛な叫びを聞きながら殺してえんだ」

大きく口を開けながら、興奮したようにトモヤはまくしたてる。その声と言葉を聞いて、ミュキはさらに身体の震えを大きくさせる。「最低な人間なのね、あなた。人を殺すことに何の罪の意識もないの？」

見下したように言うミュキだが、

「そんなもん持ってたかなんだ？ 人を殺すことに抵抗感を覚える、とても？ そんな綺麗事なんて聞きたくもねえよ！」

トモヤは一蹴する。そして、我慢ならないというようにミュキに対して再度突撃をしかけた。

「……っ！？」

しかし、予知していたかのようにミュキはあっさりとそれをかわす。未だに震えている身体のそれは、恐怖に対するものではなく武者震いだっただけだ。

「どという動機であなたが人を殺すのかは知らないが、私は死ぬわけにはいかない——っ。ここで倒れるのはあなたのほうだ！」

ミュキは強くそう宣言した。

「ほざけ、女ア——！」

それを聞いたトモヤは吠えて、両手に作りだした火球を放つてくる。

トモヤが放った二つの火球は先ほどと同じテニスボール大のものだが、その速度が今までよりも断然に速い。

（速い——！？）

火球の速度が先ほどのものより速いことにミュキは回避行動が遅れる。

「もらった——っ！」

ミュキの反応が遅れたことに、トモヤは勝利の声を上げた。

「まだ、よ——！」

しかし自力での回避ができないと判断したミュキは、自分が立つ

ている地面に上昇気流を生み出す。その風に乗ったミユキは一瞬のうち三メートルほどの空中まで上がり、火球をかわす。

「な……！？ 逃がすかア！」

空へ飛んでかわしたミユキにトモヤは一瞬驚くが、すぐに追撃の火球を放つ。

その火球も速度とサイズは先ほどのものと同じだ。トモヤは力をセーブしていたわけではないだろう。しかし、ミユキには最初の火球よりも速度が上がっていることに疑問を覚える。

追撃の火球も、さらに空高く上昇することで難なくミユキはかわす。

（火球が主力攻撃なら、それほど脅威じゃない……っ！）

火球をかわしたミユキはそのまま反撃に出る。両手を広げて周囲の風を集め、それを胸の前で細く長く収束させていく。

（風の槍！？）

トモヤがそう思ったように、ミユキの手に集められた風は周囲の埃や落ち葉などを纏い、その形が槍だと分かる。風の攻撃は風圧によるものだ。風の槍の先端は周囲の風を集めてさらに凝縮されている。その攻撃力は身体が打撲で済むようなものではないだろう。

「くらえええええええっ……！！！」

作りだした風の槍を、ミユキは投擲なげのように投げつける。

風が壁として襲ってくるのではなく一本の槍として襲ってくるのだ。しかし、それはやはり風であり、風速二〇メートル近い強風だった。

「くそ……っ」

自身が放った火球をはるかに超える速度で迫ってくる風の槍を、トモヤは地面を横つ跳びで転がってかわす。

標的を失った風の槍はそのまま地面へと衝突した。その衝撃は凄まじく、風の槍が衝突したコンクリートは簡単に陥没し、地面と衝突した風の槍は余った力を周囲へ衝撃波として放つ。

「な——っ」

その衝撃波が、地面を転がったトモヤを襲った。

衝撃波を受けたトモヤは、その衝撃でさらに数メートルも吹き飛ばされ、背中を電柱にぶつけることで止まる。

「やったか……」

会心の一撃を与えた、とミユキは判断し、慎重に地上へと降りてくる。その視線はいまだトモヤへ向けられているが、警戒はいくらか弱める。

（向こうはちゃんと逃げれてるかな……）

そう思いを馳せるように、どこまでも空高く昇っている炎の黒煙を見上げた。

第一章 世界が変わった時 ？

明かりが点いていないかつての企業オフィスは、壊れた窓ガラスから微か^{かす}に入ってくる月や星の光で照らされているだけで薄暗い。

もう何年も使っていないだろうオフィスは悲惨な状態であり、何個も並べられているオフィステーブルは荒れ果て、壁際に配置されているロッカーからは異臭までもしてくる。そのロッカーの中には、ずっと放置されていた取引先かどこかの会社名がずらっと記載された書類が束になって置かれていた。一方のオフィステーブルには誰かがここに座って仕事していた名残が残っており、テーブルの上に置かれたマグカップの汚れは経過した時間の長さを如実に表している。

そのような複合オフィスのワンフロアに悠生^{ゆうき}、タクヤ、アオイの三人はいた。

「……………」

「……………」

悠生たちは誰も声を発しようとしなかった。

先ほどの言い合いで、ずっと走っていた体力をさらに消耗させたということもあるが、ユウキを追っている防護スーツに身を包んだ男たちが今も追いかけてきているのだ。その男たちに見つからないように、なるべく声を上げないようにしている。

窓ガラスがなくなった窓から、遠くのほうで鳴り響いている爆発音が聞こえてくる。それは、恐らくトモヤといていた『覚醒者』とミユキが戦っている音だろう。聞こえてくる爆音にも炎によって焦げた匂いが混じっていそうで、悠生はただじっと自分を守ると言ってくれたミユキの安全を祈る。

（エンジン音は聞こえてこないな）

悠生がミユキの身を心配しているなか、タクヤは通りに面した窓

から視線だけを出して、じつと外の様子を窺っていた。

アオイの報告では追手の男たちは装甲車二台で追いかけてきているとのことだった。遠くから爆発音が聞こえてくるほど周囲は静かなのだ。それよりも近くにいたるだろう装甲車の駆動音が聞こえてこないことにタクヤは疑問を抱く。

（どこか見当違いの所を走ってるのか？）

そう考えるが、確証はなかった。

タクヤの目は窓の外の通りに向けられており、とてつもなく速く目線はあちこちへと動いている。一刻も早く追手の男たちの場所を把握しようとしているのだが、上手くいっていないのだ。

そんなタクヤの行動に気付いてか、悠生の近くのオフィスチェアに座っているアオイも目を閉じて『覚醒者』としての力を使って、装甲車を探している。しかし成果はなかった。

「……………」

（居づらい……なんだ、この空気）

タクヤもアオイもじっとしていて声を上げないため、同じ場にいた悠生は先ほどの言い合いによる気まずさを強く感じていた。

普段ならしないような相手の胸ぐらを掴むということまでしてしまった悠生は、タクヤやアオイの顔をまっすぐ見ることができないでいる。二人の様子をちらちらと横目で見ていただけである。

その視線に気付いているのか気付いていないのか、二人は悠生のことを今は放っている。それが悠生の気まずさを余計に助長しているのだ。

「……………はあ——」

（これからどうなるんだろ…………）

時間も持て余している悠生は、ぼうつとこれからのことを考えてみる。

こちらの世界へ飛ばされてから一日どころか半日も経っていないのだが、ゆっくりとする時間すらなかった。眠気はないが、身体の疲労は随分と溜まっている。この廃れたオフィスがオアシスに感じ

られるほどだ。

（俺一人じゃ何もできない——か）

考えてみたこれからのことは、最悪な結果ばかり浮かんで、自分一人じゃどうしようもないことを悠生は実感した。

「な、なあ！」

そう感じた悠生は、思い切って二人に声を掛けた。

「……？」

「どうした？」

目を閉じていたアオイはぱちつと目を開けて視線を向けてきて、窓の外を見ていたタクヤは振り返って尋ねてきた。

「いつまでここにいるんだ？」

「言っただろ。奴らが通りすぎるのを待ってから、だ」

悠生の質問に、タクヤは何度も言わせんなと呆れた。

しかし、このオフィスに身を潜めてからすでに三〇分近く経っている。追手の男たちが装甲車で移動しているのなら、とつくに通り過ぎているだろう。それなのにまだ隠れている必要があるのか、悠生には疑問だった。

「もう行ったんじゃないか？」

その疑問を率直に口にした。

「それは分からない。爆発音は聞こえてるのに、エンジン音が聞こえてこないんだよ。安全が確認できないと移動はできない。こっちは無力に等しいんだから——」

タクヤは冷静にどうするべきかを説明した。

タクヤもアオイも『覚醒者』としての直接的な戦う力はミユキや先ほどのトモヤよりもないのだ。銃を持った相手にはミユキのように真正面から立ち向かうなんてことはできない。

「あと一。分待つ。それでも現状が変わらないなら、ここを出て、裏地を通って逃げよう」

「……あ、ああ、分か——」

タクヤの判断に悠生が頷こうとしたところで、ずっと黙っていた

アオイが声を上げる。

「追手がビルに近づいている——っ!!」

声を上げたアオイは、先ほどと同じように両目を閉じていた。

「……!?!」

「そ、そんな——!?!」

アオイの言葉に、悠生とタクヤはそれぞれ驚いた。

特に、タクヤの驚きは大きい。ずっと窓の外の通りを見ていて、

追手の男たちの気配をまるで感じなかったのだ。

「途中で車を捨てたみたい。歩いて私たちを探してる!」

驚いている二人に、アオイは続けて追手の様子を伝える。おそら

くこの周囲を飛んでいる鳥と視界共有をしているのだろう。その視野は人間のものよりもはるかに広い。

「最初に装甲車で追ったのはフェイントか!?!」

「私たちが路地に入っただけからかも——」

どちらにせよ悠生たちがビルに隠れてから三〇分以上も時間が経っている。もうすぐそこまで追い付かれているだろう。

「どうするんだ?」

二人の会話を聞いていた悠生が尋ねた。

「このビルから出るしかないだろうな。俺たちがここに入ってからかなり経ってる。奴らも俺たちのだいたい位置を把握したかもしれない。とりあえず『ルーム』までは辿りつかないと」

アオイの報告を聞いたタクヤは頭を掻きながら、しまった、というように答えた。

追手が装甲車に乗っているという最初の報告で、タクヤは追手の男たちは移動速度を優先したのだと判断した。

その判断は間違いではないだろう。ミユキの力で先に逃げることに成功した悠生たちに追いつくためには、悠生たちよりも速い移動手段でなければならない。この街のことを知らなければ尚更である。しかし、追手の男たちはタクヤの思惑通りには動いていない。

（『ルーム』……?）

タクヤの言葉の中に、悠生は気になる単語を見つけた。

会話の内容から言葉の意味を考えると、今悠生たちが向かっているところの名前なのだろうが、それが一体どこでどのくらい時間がかかるのか悠生には分らない。

「……そうね。じつとしてるだけじゃいけないわよね」

タクヤの考えにアオイも頷いた。

アオイもタクヤと同様に『ルーム』まで逃げる事ができれば、大丈夫だと考えている。そして、それは間違いではないだろう。今居る場所よりも『ルーム』の方が安全であることは間違いのないからだ。

「そこに行くまでにはどれくらいかかるんだ？」

二人の会話を聞いているだけだった悠生が、間に割って入って質問した。

「そうだな……、どれだけ急いでも小一時間はかかるだろうな」

「そんなに!？」

「ああ。今、居る場所は街の外れにある『眠る街』スリープタウンだ。そこから俺たちが向かっているのは街の中心により近いところにある『ルーム』だ」

悠生に、タクヤが短く説明を行った。それを聞いた悠生はまたしても聞き慣れない単語に疑問を抱くのだが、それをさらに追究している時間はなかった。それまで座っていたタクヤとアオイが立ちあがったのだ。

「移動するぞ。ここにはもういられない」

立ち上がったタクヤは、壊れた窓から外の景色を見つめる。

そこから見える空は白んでいつていた。

第一章 世界が変わった時 ？

ここは全壊半壊の状態の建物ばかりの街の、ある通りだ。

その通りをスピーカーの声の男——シンジは歩いていた。シンジの周囲には防護スーツに身を包んだ五人の男が同様に歩いている。五人の男はそれぞれ手にアサルトライフルを持っており、こまめに周囲へ視線を配っている。

「反応は？」

シンジは、隣を歩いている部下に尋ねた。尋ねられた部下は手に持っている機械のディスプレイをじっと見つめている。

「先ほどの地点よりかなり移動した地点で、新しい反応がありました」

「そうか」と部下の報告を聞いて、シンジは短く唸った。

（こちらが近づいていることにやっと気付いたみたいだな）

シンジは冷静に悠生たちが動いたことを分析する。そして、悠生たちにも感知タイプの『覚醒者』がいるのだらう、と踏んだ。

「向こうには、『風』の女以外にも『覚醒者』がいるみたいだな。

我々の動きに気付いたのもそいつだらう。こちらも手を打つぞ」

周囲をついてきている五人の男たちに、シンジは指示を出す。その指示を受けた男たちは、それぞれ散り散りに走りだしていく。

散り散りに走りだした部下の男たちを見て、シンジはニヤリと笑う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9359y/>

現実世界と並行世界

2011年12月25日18時51分発行